
恋と世界とその終わり。

ルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と世界とその終わり。

【Nコード】

N1445B

【作者名】

ルト

【あらすじ】

タイトル変更しました。……—それは、師走の半ばのことだった——……。突然、突拍子のないメッセージが全世界に発信された。曰く、『来年は来ない。一月一日に世界が終わる』。どこか信じてしまう魔力を持った端的な文章を受けた僕が残された時間にすること。そんなこと、決まり切っている——……

世界の終わる結構前（前書き）

恋愛っ気の強い絵空事です。有りがちなストーリーですが、ご一読ください

世界の終わる結構前

それは師走の半ばのことだった。

突如全世界に向けて送信者不明のメッセージが発信された。それは短かったが、ある意味で全世界を震撼させるに足る内容だった。

『来年は来ない。一月一日に、世界が終わる』

果てしなく突拍子のない、根拠薄弱も甚だしい内容だった。何故、どうやって世界が終わるのが書いてないし、どういう状況が『終わった』と言えるのか解らないため人々の半数は

「タチの悪い悪戯だろう」

と気にも留めなかった。

では、残りの半数はというと、驚くべきことにそれを信じてしまったのだ。と言っても半信半疑のようなもので、自棄になって暴走するというヒトは居ない。皆万が一のために身辺整理をしておこうといったくらいだ。終わっても悔いの無いように、終わらなくてもそれはそれで、というような気分なのだと思う。

何故信じてしまう人が居るのかと言えば、おそらくその短く端的な文章には不思議な魔力があるのだろう。もしかしたらそうなのかもしれない、と思わせる魔力だ。

一度そう疑ってしまえば人間というのは面白いもので、そのことを意識せずに居られない。だから偉い人はそんなことがありえないという事を必死に証明するし、凡人は悔いの残らない人生にしようとやり残した事をやっていく。実際この数日で結婚する男女が急増したそうだ。身近なところでは、僕の身の回りでもカップルが急増している。

そして斯く言う僕も、そういう信じてしまった人の一人だったの

である。

§

その日、僕はいつも通り七時に起きた。今日も学校だ、憂鬱だなあといつも通りに思いつつカバンの中身を詰め替えブレザーの制服を着込むと階下に下りる。

三人家族である我が家の大黒柱はすでに出勤していてダイニングには居ない。家庭を守り財布を握る母が居るばかりだ。今日も寒い中僕の弁当を作ってくれており、僕は彼女に足を向けて眠れませんが礼を言わないのは僕が反抗期だから。

「お早よう」

「お早よう、さっさかご飯食べちゃいなさい」

母さんは弁当を詰めながら僕のほうを見もせずと言う。見てないと知りつつも頷くのは何の癖か。

僕は席につき、母さんの言う通りさっさかご飯を掻き込んだ。朝にお茶漬けと味噌汁というのは気が利いているのかいないのか。

僕はそんなことを思いつつご飯を食べ終えた。時間に余裕はあるが早速登校することにした。コートを羽織りマフラーを巻き家を出て、手をポケットに突っ込む。これで寒さ対策はカンペキ。

僕は学校へ足を向ける。こんな状況でも習慣というのは恐ろしい。学校へ行かなければならない強迫観念が刷り込まれているのだ。日本人は勤勉というが、日本の教育がそのように洗脳を施してるのではと思う。

僕は白い息を吐き、それが宙に溶けるのを眺めてから澄み切った空を見上げた。

「あれから、もう五日も経ってるのか……」

『あれ』、即ち世界が終わると宣言するメッセージ。戸惑う期間は三日間、その間に政府や各分野のお偉いさん達は色々調べたらしい。

惑星の衝突や隕石で世界が終わるのではないかという疑問には、この時期地球に接近する惑星はないしそのような隕石の接近は見られないと返る。

地球規模の大地震が起きるのではという疑問には、その予兆は見られないうえ仮にそうだとしても事前に知る方法は無いはずだから信憑性に欠けると返る。

その他色々な質疑問答の討論が各局で放送していた。どれもこれも似たような話をするばかりで、僕はメッセージが発信された晩以降テレビの特番は見ていない。

突然のメッセージに混乱する期間が過ぎると、こんどは人の行動が二極に分かれた。悪戯だろうと割り切って今まで通りの生活をする人と、取り敢えず身辺整理をしておこうという人。

前者はともかく、後者で片思いの相手に告白するという人が続出した。もしたただの悪戯なら踏み切りを付けさせてもらった分犯人様だろう。その行動は今後の人生でいい経験となるに違いない。

暇潰しの思考を回しているうちに学校へ着いた。我が小山中はサボタージュに踏み切る生徒が多くない。他校では半数近く休みの生徒が居るところもあるようだ。

小山中の場合、どうせもうじき終業式だから今からサボる必要もないという考えが多いように思う。よい判断だと全校集会で褒めてやりたい。やらないけど。

そして僕は2-Aの教室へ入る。ここが我が学びの舞台だ。気取った文を考え自分で苦笑しながらコートを自席の背もたれに掛けたとき、声を掛けられた。

「お早よう、橋本。こんな時世でも登校とは真面目だな」

振り返ると幼なじみといって差し支えない学友が居た。彼とは小一からの付き合いで、言い換えれば腐れ縁である。

ちなみに彼も一昨日思い切って告白し彼女をゲットしている。僕は嫉妬も交じっているのを自覚しつつ言っただけだ。

「遠回しに自画自賛する阿呆はフラれるぞ、明日辺り」

彼は照れたような苦笑を浮かべ、近くの空いている席に座ると僕に返した。

「まだコクったこともないヤツがフラれるとか大口叩くとは世も末だな」

カバンの中から教材を机に移し替えつつ、僕は前半部分を見送っていて言い返した。

「狙ってジョーク言うのやめなよ。笑えないだけならともかくそのネタはシビアだ」

「敢えて肝心なところ無視するなよ。橋本、お前芹沢のこと好きなんだろ」

僕は喉の奥をグツと鳴らした。動揺から吹き出しそうになったのだ。芹沢さんがまだ登校してないことを確認し、隣で真面目腐った顔をしている野郎を睨む。

「いきなりナニを言いだすんだこのストコドッコイ」

「言い逃れも最近めつきり聞かなくなった罵詈雑言を使うのも無駄だぞ。俺にはワカッテル」

真面目腐った顔の口元がひくひく震えている。笑いを堪えているのだ。どうひいき目に見ても冷やかすつもりにしか見えない。

その時芹沢さんが登校してきた。僕は会話からばれたくないので彼を手で邪険にして追いやろうとする。

「噂をすればなんとやらだ。あんまモタモタせずさくつと言っちゃま
えよ」

人間死ぬ気になれば何でもできる、などと陳腐な台詞を吐きながら野郎は立ち去った。死ぬ気になる前に死ぬかもしれない今の状況を思う僕は溜め息を吐いた。

そして、始業を告げるチャイムが響く。

世界が終わる割りと前

僕は今、猛烈に自己嫌悪している。

現在六時限目、これが終われば帰れるのだが今だけ僕は生まれて初めて授業はまだ続いていてくれと願う。時計をちらりと見るが嗚呼無情、普段より早く十分前が訪れた気がしてならない。

今日僕は、芹沢さんを誘って一緒に下校しようと思っているのだが、如何せん勇気が足りない。心構えがいつまで経っても出来ないのだ。どこかに勇気落ちてないかなあ？

（現実逃避してる間にあと五分？！ 本格的に覚悟を決めないと！）

僕は胸中で絶叫し、念じる。なにも帰りを誘おうとしたのは今日が始めてではない。今日こそは、いや明日こそはと逃げる間にメッセーじの発信から一週間が経っているのだ。いつも冷やかしながら励ます腐れ縁の野郎はこの体たらくに呆れ果て、とうとう何も言うてこなくなってしまった。

僕だって誘えるものならさっさと誘ってしまいたい、とどこぞの誰かに責任転嫁。その天罰か、非情にも終業を報せるチャイムが鳴り響いた。

一縷の望みを託した終学活も瞬く間に終了し、僕は青くなる。

「橋本、お前ホント間違いない絶対今日、狂いなくこの今日こそ芹沢誘えよ」

僕の肩を叩き、彼が励ましてくれる。彼は恋人と帰るためすぐさま扉へ向かってしまうがやはり彼は親友だ。世界が今年で終わらなかつたらなにかおこつてやろう。

そんなことを思いつつ、もらった勇気と自棄の勢いを使ってまだ

彼氏が出来てないらしい芹沢さんのもとに向かい、声が震えそうになるのを必死に抑えて言う。

「芹沢さん、一緒に帰ってもいい？」

言った。いや、言ってしまった。どもらずに言えたのは僥倖だろうか。

芹沢さんは眉を不審そうにひそめ、僕の唐突ともいえる行動の意図を計るように僕を見た。不本意ながら僕の緊張に強ばった顔から気が付いたらしい。怪しいヤツと思われて逃げられるよりマシなのでよしとする。

芹沢さんは一步下がり、改めて僕を頭から足元まで値踏みするよう何往復も眺めた。そして記憶を手繰るように視線を斜め上に固定。それが終わるともう一度僕を眺め、にいと笑って頷いた。

「ま、帰るだけなら」

僕は内心で勝鬨を上げた。正確には明らかに芹沢さんは様子見の姿勢でこちらに釘をさしてさえ居るうえ、例によって惚れた弱みを握られた形になっている。

だがそれでも僕はそれくらい嬉しかったのだ。初恋にしては相手が高嶺なのだから。

「ところで橋本君って家どつちなの？」

「え？ 駅の方」

答えてから気が付いた。帰る方向が逆だったらタダのアホウじゃないか。芹沢さんが良いといえば遠回りぐらいいくらでもするつもりだが、いきなり遠回りしてまで一緒に帰るなんて事を許可するとは思えない。

しかし、芹沢さんはぱつと笑って言った。

「駅の方？ そっか、じゃあ一緒だ。うっし、早く帰ろ」

僕は神とかそんなものに感謝を述べた。そしてマフラーの余分を背で踊らせながら前に行く少女を早足で追う。

僕が彼女に追い付き隣に並ぶと、彼女は僕を見上げて笑顔を浮かべると前を向いた。僕は男子の平均身長より低いのだが、芹沢さんは女子のなかでも小柄な方なので僕を見るときは見上げなければならないということに初めて気が付いた。

靴を履き替え、昇降口を出る。冷たい風がびゅうと吹き付けた。

僕はやせ我慢したが、芹沢さんは自分の体を抱くようにして身を震わせた。僕は何気なく言う。

「寒いね」

芹沢さんは僕の方を向く事無く、マフラーを整えながら普通に返した。

「ホント。寒い」

僕は何の気なしに芹沢さんの後頭部に目をやった。彼女はやや早足で校庭に足を踏みだす。僕は視線を動かさず慌てて後についていった。

誰かと、それも好きな人と並んで校門を出るというのは非常に新鮮な気分だ。抑えたくても自然に笑みが浮かんでしまう。僕はマフラーでそれを隠した。

ふと気付けば、芹沢さんが僕の方を見ていた。何かと思って目線で問い掛けると、彼女はやれやれと言ったふうで盛大に白い煙を口から吐き出した。

「なにか訊きたいこととか、ないの？」
「え？」

何を問えといってるのかと一瞬思考を巡らせたが、何のことはない。喋らない僕にうんざりしただけだ。一緒に歩きだしてから僕は『寒いね』しか言っていない。『いい天気ですね』と同レベルの発言しかしていないのだ。呆れるのもしようがないというところだろう。だが、僕は世情に疎い。家でのテレビ権は母さんに全権がある。音楽関連もサッパリだ。経済的理由から中古しか買えないので、現代の若者が赤ん坊だった頃のモノしか聞かない。オマケにたまにしか聞いたりしない。若い娘と共通した話題など持っていないのだ。僕が苦悩していると芹沢さんは本当に呆れたようにコートから携帯電話を取り出した。

「取り敢えずアド交換しよ」
「あ、うん」

僕はそれがあつたかと内心で舌を巻きながら携帯電話を取り出した。芹沢さんは僕の機種を見るなり頭を抱える。

「うわ、それいつの機種？　ゼロ円ケータイで買っにしてもまだ選
びようあるでしょうに……」
「いや、使いりゃいいかなと思って……」

僕の言いざまに芹沢さんは笑いを弾けさせた。心底呆れたように笑みを乗せた溜め息を吐くと貸して、と手を伸ばしてきた。僕は言われるままに彼女へと携帯電話を託す。

鮮やかな手並みで携帯電話の番号を呼び出すと、赤外線送受信で僕の番号やメールアドレスを彼女のケータイに登録し、同様にして

僕の携帯電話の電話帳に登録してくれた。

それにしても、と芹沢さんは僕の携帯電話を片手で器用にいじる。

「電話帳スカスカだね。私に入れても四件？　ありえないって」

言って、パチンと片手で器用にケータイを閉じると苦笑とともに僕に返した。

悪戯っぽく笑って僕に訊く。

「ね、メールのやり方解ってる？」

それはいささか馬鹿にしすぎではないだろうか。僕はやや憮然として頷く。

「そりや良かった。頭ン中お爺さんじゃないんだね」

「……そんなに言うかな。いくらなんでもお爺さんなんてあんまりだ」

僕は最早悄然として呟くように言った。芹沢さんはまた弾けるように笑い、弾むようにとんとんとステップを踏みながら笑顔を僕に向けた。

「残念だね。世界が終わるんでなければケータイの機種を奨めてあげられるのに」

僕は彼女の顔を見返す。芹沢さんがあのメッセージを信じているのは意外だった。それが表情に出てたのか、彼女は足を止めて僕に訊ねてくる。

「あ、もしかして橋本君って信じてない側？」

「いや、僕もあのメッセージはそれなりに信じてる」

信じてると言うとなんかそうなる事を望んでいるふうに聞こえてしまうのは気のせいだろうか。僕は一応付け足した。

「まあ、世界が終わるなんて物騒なこと、ないに越したことないけど」

しかし、芹沢さんは僕の付け足しに首を傾げた。身を返すと両手を後ろ手に組んで、後ろ太股で学生鞆を蹴って揺らす。

「そうかなあ？ 私はもう本当に終わっちゃってもいいような気がするんだよね」

「え……、な、なんで？」

突然の想定外なコメントにやや焦って僕が問うと、芹沢さんは片手を持ち上げ髪をいじりながら答えた。

「だってさあ、みつともないと思わない？ 子供は親に言われるまま不満を抱えて勉強して、大人はみんな生活のためとか言いながら愚痴を垂らして仕事する。生きてないっていうか、張りがなくていうかさ」

芹沢さんはそう言って信号待ちで止まった。僕は驚いて彼女の背中を見つめていた。

彼女の言いたいことは分かる気がする。つまり、ダラダラと生きていたくないということだろう。確かに世の大人達を見ていると『このまま生きていても苦勞が増すばかりでどうしようもないのではないか』と思うときがある。

でも、と僕は思う。

でも、だからって死ぬことを善しとしていいのだろうか、と。

思いつちに信号が青になった。でも芹沢さんは歩きださない。彼女の後ろに立っている僕も同じ。

やがて芹沢さんは躊躇った後のように声を上げた。

「勘違いしないでよ、私は厭世的な性格じゃないんだから。ただたまにこんなふう思うときもあるっただけ」

やや早口に捲し立てた。僕はそんな彼女の姿を可愛らしいと思いつたりと頷いた。

「うん」

芹沢さんはそつとこちらを窺うように盗み見る。彼女には僕の表情はどんなふうに見えているのだろうと思いつながら、僕は続けた。

「分かるよ。たまにそんなふうを考えちゃうことあるよね」

彼女は微笑んだ。前を向き慌てたように僕に声を投げる。

「信号が点滅してる！ 橋本君、走って！」

「え、ええ！？」

走りだした彼女の大声にひっぱたかれるように僕は走って横断歩道を渡った。車がなくて良かったと思う。

そして、そのしばらく先で僕達は分かれてそれぞれの家路に就いた。

世界の終わるそこそこ前 上

「ふわぁ……、眠う……」

僕は大きなあくびをして言った。朝の登校時は冷たい空気のなかに枯葉が舞っていて、どこか澄んでいるような気がする。僕はコートの襟をすぼめた。目蓋が重い。目を瞑って歩くとふらつくので危ないが、やらずにはられない。

昨日の晩、早速芹沢さんからメールが来て、さまざまな事を遅くまでレクチャーしてもらったのだ。

僕は主に志望校や勉強法のことを尋ねるが彼女はその度に『ぎゃー』などの擬音語と顔文字を題名にして返信してきた。未だにそれらの顔文字が何を表しているのか分からないものもある。

そのようなメールでのやりとりの最後、その文面にはこう書いてあった。

『明日の朝、今日別れたところで待ち合わせ』

僕は、思い出すだけでニヤリとしてしまう自分が悲しい。そういうワケなので僕は普段よりさらに早く家を出たのだった。

角を曲がり、道路を横切って緩やかな弧を描く傾斜を登っていくと、待ち合わせ場所だ。昨日芹沢さんに手を振った場所に来ると、僕は白い息を吐いた。

早すぎるか、さすがに誰も居ない。僕は隙間から雑草の生えたコンクリートの壁に背を預け、芹沢さんを待つことにした。

待つこと五分、十分。僕は冷えきった体を励ますように手に息を吹き掛ける。

待っている間中瞑想をしていたので、眠気は大体解消された。根深い睡魔が目蓋の裏を突いているような錯覚と眠気で頭の奥が鈍く

なっていることは変わらないが。

「あつ」

驚いたような声が聞こえ、そちらに目をやると少女がチェック柄のマフラーを踊らせながら僕のほうに走ってくるのが見えた。芹沢さんだ。

「えー、ウソ待ったー？ 私いつもより十分も早く出たのにな」

芹沢さんは不思議そうに首を傾げる。僕は小さく笑い、芹沢さんに歩くよう促しながら応えた。

「僕もいつもより十分早く家を出たんだ。待たせたら悪いと思って」
「なんだ、おんなじようなこと考えてたんだ」

可笑しそうに言って、芹沢さんは笑った。僕も釣られるように笑みを浮かべる。

そして芹沢さんはふいに大きなあくびをした。あふ、と息を吐くと僕に気付いた芹沢さんは恥ずかしそうにマフラーを口元にずり上げる。

「ゴメン、昨日メールやりすぎちゃって。二時まで起きてたの」
その告白に僕はびっくりした。二時なんて未知の領域である。寝不足甚だしく、授業に集中できないのではないだろうか。

僕がそう言うと芹沢さんは苦笑を浮かべて言う。

「あー、私、授業聞かないから。今日なんかだと国語とか寝ちゃっ
し」

僕は信号待ちの一時停止ついでに芹沢さんに尋ねた。

「居眠りなんかして大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるよ。今度ノート写させて」

それじゃダメなんじゃないかと僕は思うが、ノートを綺麗に取ろうと決心してしまう僕は馬鹿だろうか。

僕の心中を知ってか知らずか、芹沢さんは笑顔を浮かべて青になった横断歩道を闊歩する。

そうして昇降口を抜け階段を上り教室に辿り着くと、やはり言うか幼なじみといって差し支えない彼が声を掛けてきた。

「お早よう、橋本に……芹沢？」

「そ、私芹沢。お早よ」

芹沢さんはそう言うなりつかつかと彼女の席につき、カバンを下ろした。彼が小さく何事か呟いたが入り口につつ立ったまま彼女の横顔を眺める僕には聞こえなかった。彼が僕に顔を向け、声を掛けてくる。

「おい、あれからどうなったんだ？ 言えたのか？」

「ああ、うん。なんとか」

本当によくなんとかあったもんだと思う。一歩間違えば僕はただの変質者だ。

彼は僕の言葉をどう受け取ったのか、気遣わし気に僕の肩をぽんぽん、と叩く。

「そっか、よかったよかった。これで心残りはないな」

「どういう意味だ、おい。それにまだ結果言っていないんだけど」

「いやあ、無理しなくていいぞ。俺には彼女が居るとはいえ俺とお前は友達だからな」

彼は仰々しく両手を振り上げ、演技掛かった口調で言う。さり気なくム力つくことを言いやがった。

僕は机脇のフックにカバンを吊し彼に言い返そうと口を開き掛けたとき、始業を告げるチャイムが鳴った。

彼はチャイム着席だ、などと言って僕を座らせ自分もすぐ席に戻った。くそ、真面目なやつめ。

世界の終わるそこそこ前 中

その日の授業を僕は久しぶりに真面目に聞いた。ノートを丁寧に書くためだ。そして授業というのは真面目に聞いていれば内容は案外理解できるものなのだと思います。

ちなみに芹沢さんは国語の授業中本当に眠っていた。そのせいか、今日の体育では男女同一のグラウンドで行う長距離走を元気に駆け抜けていた。僕よりタイム良さそうだった。

昼休みの頃には芹沢さんは完全復活しており、女子グループでなにやら笑い合っていた。僕の噂話でないことを切に願う。願っていたせいか食べるのが遅くなり、恋人とのランチを終えた彼にどつかれたのは余談である。

そんなこんなで結局休み時間などに芹沢さんに話し掛けることも出来ず今日の六時限目も真面目に受けた後。即ち放課後がやってきた。

僕が机のなかに押し込んだ教材類をカバンに流し入れていると頭を柔らかい布ではたかれた。彼かと思いつつ後ろを振り仰ぐと、芹沢さんが立っていた。頭を叩いた柔らかい布はどうやらマフラーだったようだ。

「準備遅いねー。もしかして全部持って帰ってるの？」

「うん。まあ家で勉強するわけでもないけど」

芹沢さんはそれでも感心するように僕の手元を見ていた。僕はなんだか照れ臭くなって粗相をしないよう細心の注意を払いながら最後の教材をカバンに入れ、閉める。

芹沢さんは僕が立ち上がるのを確認するとマフラーを整えながら言った。

「んじゃあ、帰ろっか」

「え……」

僕は面食らう。一瞬何を言ってるのか理解できず、それが一緒に下校しようと誘っているということに気付くと、僕は余計に驚愕した。芹沢さんの方から誘ってくるなんて考えもなかったのだ。

僕の反応に彼女は眉根を寄せ、不機嫌そうに言った。

「なによ、不満でもあるの？」

「いやそんなまさか！ そうだね、帰ろっか」

僕は内心かなり焦った。ここで機嫌を損ねたくはない。そして恋人にも見える僕達の振る舞いが気になり思わず周囲に視線を走らせる。

だが今の時期カップルはいくらでも居るのでたいして気にもならないらしく周囲は至って普通といった様子だった。この前恋人が出来たばかりという彼だけが興奮していたのが目につく。

僕は彼を気にしないように努めながら、前に行くチェック柄のマフラーをコートの背に張りつけた彼女を追い掛ける。

昇降口を出ると、芹沢さんが口を開いた。

「明日で終業式だね」

「うん。いつもより早いって言ってるけど、去年どうだったわけ？」

僕は応えつつ首を傾げる。長期休暇に入る日付なんていちいち覚えちゃいない。

芹沢さんは記憶を手繰るように虚空を見上げ、一つ頷いた。

「多分例年より早いよ。クリスマスは学校あった気がするもん」

「そういえばそうだったかも」

芹沢さんがそう言い、僕は同調した。確かにそんな記憶がある。でもクリスマスなんて恋人と子供のためにあるような日なんて思いだしたくもない。サンタさんが居ないことを知っている彼女居ない暦が人生と同じ僕はそう口のなかで罵った。

芹沢さんは僕の思考を読んだかのような絶妙なタイミングで言う。

「クリスマス彼女と過ごしたことないんですよ」

ギクウツ

という音が出たように思う。芹沢さんは僕の様子を観察し凶星だったことに満足したふうな微笑を浮かべた。

「もしかして、彼女出来たことないとか？」

「……うん」

僕はうなだれるついでに頷いた。そしてふと芹沢さんにも訊ねてみる。

「芹沢さんは、彼氏出来たことある？」

「あるよ」

あっさり認められ、僕は衝撃を受ける。その一方で慌てて芹沢さんは可愛い娘だから持て囃されて当然だと自分に言い聞かせる。

芹沢さんは苦笑を浮かべて、気まずそうに言った。

「あー、ゴメン。その期間って三日くらいだし、厳密に付き合ってたなんて言えないかもしれないけど」

僕はそれを聞いて安心したりはしないけれど、興味はそそられた。

芹沢さんが振ったのか、振られたのか。それは何故か、などということ。

質問が口を突いて出ようとしたところで慌てて飲み込んだ。いくらなんでも失礼すぎる。過去のことをあれこれと詮索するのはよくないだろう。

しかし芹沢さんは深呼吸して、言った。

「ね。昔の彼氏の話、聞いてくれる？ いい加減誰かに聞いてほしかったんだ。みんな気を遣っちゃってさ」

僕はなかなか首を縦に振れなかった。芹沢さんの表情を見ていれば分かる。かなりつらい出来事だったのだろう。なのに、なぜ芹沢さんは僕に聞かせようとしたのだろうか。

気付けば、僕はこう言っていた。

「芹沢さんが話したかったら、話して。途中で止めたくなくなったらいつ止めてもいいから。僕はいつでもちゃんと聴くよ」

芹沢さんは僕の妙な言いように訝しげな顔をしたが、やや安心してように表情を緩めた。

そしてとつとつと、それを話しはじめる。目の前の信号が点滅を止め、赤になったのを僕は見た。

世界が終わらないはずだった頃の話（前書き）

芹沢さんが昔の事を話している体系になります。この話は全て芹沢さんの台詞ということになります。

世界が終わらないはずだった頃の話

昔、っていうか去年だけど。

夏に差し掛からんとしたある日、私が下校しようと下駄箱から靴を取り出したとき靴と一緒に白くて薄いものが落ちたの。見れば、それは靴に付いた砂とかに塗れて汚くなった紙だった。ゴミかと思って素通りしようとしたとき運悪く先生が通り掛かって私にちゃんとゴミを処理するよう言ってきた。

よっぽど無視してやろうと思ったけれど恐い先生だったから仕方なくその紙を拾って何の気無しにその紙を見てみたわけ。するとそれ、明らかにラブレターだったわけよ。そう、恋文ってヤツ。

その頃はちらほら私のことが好きな男子が居るとか言う噂は耳にしてから、ラブレターって以外に心にくるなあ、とか軽い気持ちだった。

読んでみたら屋上で待ってる、って書いてあってさ、行ってみたのよ。鍵が壊された屋上の扉をくぐってみたら倉橋君が居た。

バスケ部のエースで成績がいつもトップクラスっていう『あの』倉橋君。

当然のごとく告白されて、私も好きな人とか居なかったから二つ返事で付き合うことにしたわ。

翌日から早速デートすることになったんだけど倉橋君、いきなり手をつないだりとかでさ。かなり積極的っていうか、恋人イコール両想いって観念があるみたいなんだ。昨日の今日だっていうのにね。それでさ、別れ際にキスを求めてきたの。その時は尚早だと思って断ったんだけど、なんかそれがダメだったみたい。

翌日はもう気まづくなつてその次の日には倉橋君もともとモテるから周りに流されて電撃破局。早いもんだったわ。

しかも悪事千里を走るっていうのかな、私が倉橋君を振ったことになって『あいつはダメだ』的な雰囲気になつてったのよ。その後

はもーひどいもんよ。私全くモテなくなつたのよ。

……ま、それだけで終われば良かったんだけど。

そんな時私、別にモテなくても友達と遊んでればいいって感じだったんで気にしてなかったんだけど、ある日ね。一学期の最後らへんかな？ 教室移動のあと、授業の片付けで遅れてただけど聞いたちやつたのよね。倉橋君と女の子が話してるのを。

「倉橋君、じゃあ美香とは二週間で私に乗り換えたってこと？」

「まあ、そうなるのかな」

私はそれを聞いてうんざりしたわ。倉橋君、いや倉橋ってひどい女たらしだつて別れてすぐ後に知つたから。私は構わず二人の後ろを通り抜けようとしたんだけどね。思わず足が止まつたわ。

「最短は芹沢の三日なんですよ」

「あー、あれはカウントに入らないかな」

知らず聞き耳を立てていることに私自身気付かなかった。何を思うのも忘れて立ち尽くしてた。

今思えばその時嫌な予感ほしてたし、逃げちゃったり何事もなかったように通れば良かったかな。

「芹沢のは二股だったし」

私は雷にでも打たれたようだった。女の『エー』とか言う声がその時の私には耳障りでしょうがなかった。嘲られているような気がしたのね、きつと。

「アレね、罰ゲームだったんだ。ついでだし恋人っぽい事やろうと思ったんだけど、あいつにもなんか好きなヤツでも居たんじゃないか？ デートン時なんもやらなかったし」

セクハラだと思ったわ。罰ゲームなんかで付き合おうだなんて最低だ、って。でも、その抱いた怒りにもあの感情はくすぶってて、次の言葉で怒りが叩き潰された。

「そんな理由で付き合うなんて失礼とは思っけどさ。でも芹沢みたいなつまんないヤツ、遊び以上じゃ絶対モテないじゃん？ だからなんか恋人っぽい事体験させてやろうとか思ってた」

芹沢みたいなつまんないヤツ。

どういう意味よ、倉橋みたいなくだらなないゲスにそんな評価されたくない。その時はそう思ったわ。

なにより倉橋なんか二股かけられたうえで下手な氣を使われたらしいってのが氣に食わなかった。

でも、単に強がりだったみたい。後から後から涙がこぼれて、みっともないっいたらなかったわ。こんな姿を万が一にも倉橋みたいなやつには見せたくなかった。私は逃げたわ。

その時泣きながら考えて氣付いたんだけどさ、付き合ってた頃は私だって倉橋のこと想ってないなりに真面目に付き合ってたのよ。倉橋のこと知ろうって努力したり、服装とかにも氣を使ったり。それがかえってその時の私には辛かった。遊ばれてる身で何やってたんだろうって、馬鹿らしくなって。

それ以来、私は軽度とはいえ男性不信に陥ったわ。少なくとももう恋愛なんてしないって思った。

それから私はもう男の子と付き合わないようになった。一年半経った今でもその禁は破ってない。

世界の終わるそこそこ前 下

僕は沈黙する。言葉が見つからない。芹沢さんも黙ってしまった。僕達は既に別れ道のＴ字路に辿り着いていたが、芹沢さんが話しかけていたので正面のコンクリート壁に二人して背を預けていたのだ。背にしたコンクリートが冷たいことに僕はやっと気が付いた。

「……あ、……」

僕は何か言おうと声を出す、言葉は出ず声は続かない。数俊のあと結局口を閉じてしまった。閉じた口というのはとても重い。

倉橋がそんな口クデナシだったなんて知らなかったし、芹沢さんへの仕打ちに対する憤りは確かにある。だが言葉にならない。僕はただ芹沢さんが男性不信だったために浮いた噂が立たなかったのか、と妙に納得していた。

我ながら情けないと思うが、その思考さえもどこか他人事のように虚ろだ。僕は彼女の話に大した感想さえ抱いていなかった。

要は、僕は衝撃を受けているのだ。失語症という程ではないに決まっているが今の僕はどんな言葉も浮かばない。

それでも、今芹沢さんがこんな話をした理由、それだけはうつすらと分かっていた。

車が風切る音とともに僕達の目の前を横切った。赤い車だった。

「だからさ、私が今こんな話をしたのはね、その」

芹沢さんが躊躇いがちに口を開いた。聞いてて気持ちいい綺麗な声使いで彼女の意志を乗せたどこか迷いを含む旋律が紡がれる。

僕はそれをなにか音楽でも聞くような心持ちで聞いていた。

「橋本くんが私に対して純真な好意を持ってくれたのは凄く嬉しいし、私にはある意味衝撃的だった。倉橋の言葉、まだ尾を引いてたのかな」

そう言つて、ハハ、と羽が風に流れるような儚く脆い笑みを浮かべる。

「橋本くんなら倉橋みたいなヒドイ事は絶対しないって確信できるし、事实いい人だし。それに一緒に居て気が楽っていうか、素で居られる？ うん、安心できるんだよね」

ひよつとしたら凄まじく栄誉なことを言われているのではということに気付くが、今の僕にはなんの感慨も起きなかった。今日まで彼女のことは見ていたから解る、狂信的なまでの確信があるせいかもしれない。

僕は耳を傾けていた。

彼女はそれを口にした。

「でも、その……ゴメン。橋本くんとは、付き合えない。私はやっぱり、まだ駄目だから」

風が吹いた。道の枯葉を転がしながら過ぎていくそれは芹沢さんの髪を撫でていき、揺らす。

僕は小さく頷いた。言葉はない。芹沢さんが僕の首肯を見ていたかどうかは解らないが、この状況で僕が言うことなどないから反応なんて始めから無くて良かったのかもしれない。

芹沢さんは深くこうべを垂れる。彼女の口から紡がれる旋律は続いた。

「でも、その……すごく残酷なのかもしれないけど、橋本くんとは

まだ友達をやつてたいんだ」

ダメかな、という躊躇いがちな音色で彼女の旋律は終わった。今度は僕が返さなければならぬ番だ。言葉は浮かばないかと思つたが、意外にも口からは言葉が出ていた。

「それは確かに残酷だね。要するに『よいお友達で居ましょう』つていう、こつちの気持ちまで無かつた事にして現状維持にするフォーの言葉だよね？」

僕は自分の言葉を面白いと思つていた。自分の気持ちと状況判断の思考がズレている。僕は自分がなにを思つてこんなことを言っているのか分かつていない。

けれど、彼女は僕の言葉に答えを返した。

「う、まあそうなのかも……」

僕はまた、彼女に言葉を返した。

「そうだと思うよ。まあ、別にいいよ。僕は分別のある人間だと自負してるし、うん、これからヨロシクね」

「あ、うん。ありがとう」

そして目の前の、決して僕の手が届かないと知らされた少女はどこか悲しげに笑つた。僕を振つたことを気に病んでるのかもしれない。僕は彼女を卑怯だ、と思つた。

告白もしてないのに振られた人間を氣遣うなんて卑怯だ、と。

絶対に届かない場所に立つて、そんな絵画的なほどに悲しくて綺麗な笑顔を見せるなんて卑怯だ、と。

僕は去つていく彼女を見送つた。彼女へ向けて軽く手も振つた。

僕は、たぶん笑顔だったと、思う。

世界が終わるまあま前

朝は今日もやってきた。

こうしていつも通り朝を迎えると、まさかあと一週間ちよつとで世界が終わるなんて思えない。やはりあんなメッセージは悪戯だったような気がしてくる。

「……さあね」

僕は適当に呟き我を取り戻すと、支度を済ませた。

学校は今日で終わりだ。僕個人はもちろん、世界に何があつても月日というのはかわらず流れていき、日常と言うものも同時に続いていくようだ。

僕は普段通り、コートを着込みマフラーを巻いて学校に向かう。

風に舞い上がる落ち葉がいくつか僕とすれ違っていった。

僕は丁字路に辿り着くと足を休めた。昨日、芹沢さんと笑顔で別れたこの場所。悲しい笑顔と、壊れた笑顔。

僕は今になつても、あのとき自分が何を思つたのか解らない。解らない以上後悔もなにもしない。

僕はコンクリート壁に寄り掛かった。黒い車が僕の前を通り過ぎて走り去る。

と、芹沢さんが向こうに見えた。僕は壁から背を離す。彼女は僕の傍らに辿り着くと寒さにかじんだ口を開く。

「あ……、お、おはよ」

「お早よう」

僕は短く返した。僕にとつても意外なほどに弾んだ声が出た。芹沢さんは僕の声色に安堵の様子を見せたので、僕は結果オーライだ

と思うことにした。

だが、和やかなのも始めの挨拶だけだった。歩く間は無言に陥る。芹沢さんは口を開きかけては何も音を発さずに閉じるを繰り返す。そのたびに辛そうな顔をするのはたまらない。止めてほしい。

僕は現状から逃げるために口を開いた。打開ではなく、逃避。

「今日で学校は終わりだね。明日からようやく冬休みだ」
「そうだね」

思ったより普通な調子で切り出せた僕に、芹沢さんも普通に返した。

信号を無視して横断歩道を渡る。車両がないのは確認済みだ。そしてここを渡ってしまえば学校へは道を真つすぐ行くだけ。

「休み中、暇だなあ。一週間以上寝て過ごすのは勿体ない気がするよ」

「……そうだね。私も特に予定ないな」

僕の言葉に芹沢さんは一瞬だけ言葉に詰まり、しかし普通に返してくる。

僕は普通に続けた。

「今日は寒いね。また体育館で校長の話かな。まあ、うちの学校は漫画みたいに校長の話長くないけど」

芹沢さんも普通に返した。

「カイロ持ってきてよかった。体育館は寒いもんね」
「ああ、カイロ忘れた。やだなあ」

僕達は普通に取り留めもないことを話して教室に着いた。親友に
て腐れ縁の彼が話ながら入ってきた僕達を注目している。芹沢さん
と教室の中頃で別れたところを見計らって声を掛けてきた。

「お早よう。なんだ何かあったな？ 芹沢と同伴登校なんて。あ、
遂にコクったのか？」

「違うよ。コクったりなんかしてない」

僕はぶつきらばうに言った。僕の言葉に彼は一瞬口ごもり、なに
か言おうと口を開いた。

チャイムが鳴った。

もとが生真面目な彼は躊躇ったあとついと顔を逸らし、僕に一言
だけ告げて席に戻った。

「あんま芹沢にひどい事すんなよ」

どういう事だ、と問いたかったが彼はとうに席に着いたあとだっ
た。僕は肩を竦めて席に座る。それと同時に先生が入ってきた。

軽く終業式の説明をして、世界の終末を告げたメッセージのこと
を交えて話を少しした。そして廊下に整列させると体育館に向かう。
列になって入った体育館はやはりとても寒かった。

校長が体育館の舞台に立ち、話をする。それは三分ほどで終わっ
た。次々と先生が舞台上がり、休み中の生活などの話をした。宿
題はないらしいが、誰も露骨に喜びはしなかった。

式は一時間ほどで終わり学年クラス順に退場していく。僕達のク
ラスが去った跡に、誰かのカイロが忘れられていた。

教室に戻った僕達は次に掃除を行った。これも十分ほどで終わ
り、最後に成績表が返される。僕は可も不可もなく平凡な成績だっ
た。

そしてホームルームが終わり解散が許可された。にもかかわらず僕達のクラスは教室に残っていた。

「イヴの日にみんなで遊園地行こうぜ！」

ということの子細を話し合っていたのだ。話し合うといっても、みんなの都合がいい時間帯を選び行きやすい遊園地のアンケートを取り、その結果を通告するだけだった。

イヴの日なんてカップル勢が大量に辞退するかと思ったが、昼はクラスのみんなと遊び、夜は恋人だけで過ごすという話らしい。解散が早めになっただけで多くのカップルが乗り気だった。

話し合いも終わり、クラスも解散した。僕は恋人のもとに向かうとする彼を捕まえてようやく問う事が出来た。

「今朝の、どういうことだよ」

「あ？ …… ああ。まんま、だよ。芹沢を傷つけんって事。悪い、彼女に待ってもらってたんだ。またな」

「あ、あ……。じゃあまた」

彼の答えはよく解らないが、そのままつい別れを告げてしまった。去っていく彼の背に、僕は声に出さず疑問を投げた。

僕が芹沢さんを傷つけると思ったのは、何故？

「橋本くん？」

それが僕を呼ぶ声だと認識するのに半秒を要した。僕は慌てて背後に居た芹沢さんに返事をする。

「あ、何？」

「えっと、一緒に帰らない？」

「ああ、うん。帰ろっか」

僕は自分の席に戻りカバンを取って、教室の出入り口で待つてくれた芹沢さんとともに帰った。

帰り道は話をすることが出来た。……なんの話をしていたかは、思い出せないけれど。

世界が終わる少し前 上

光陰矢の如しとはこのことを言うのだろう、と電車に揺られながらふと思う。

終業式から瞬く間に数日が過ぎ、今日はクリスマス・イブだ。クラスで集まって遊園地でワイワイやろうぜと言うやや無謀な計画の日。僕がこうして電車に揺られているのも、詰まる所そういう理由である。

さしものイブと言えど午前中から人が多いわけでもないだろうと軽んじていたが、甘かった。ちよつと辺りに目を走らせれば夜な夜な睦言むつごを語らつてそんなカップルがそこかしこに居る。傍らの人影が呆れたように言った。

「人が多いな。それぞれが熱いから町中も電車もサウナなんじゃないか？ ホワイトクリスマスは望めそうにないな」

僕は溜め息吐き吐きくつだらないコトを言つた腐れ縁の彼に言葉を返す。

「黙つてなよ。男同士で語つても虚しいだけだ」

恋人持ちの彼は当然このクラス会に恋人を招いている。だが不思議な事に、彼は恋人とは現地集合としてこの僕と遊園地に向かうことを是としたのだ。断る理由が『何考えてんだか解らない』と『気色悪い』しかなく、論理の力不足によつて僕は彼と遊園地に向かうことを余儀なくされた。

彼はそんな僕を横目で見ると嘆息し、話し始める。

「そうだな、早いトコ橋本なんかと一緒にきた理由を話すとします

か。朝っぱらから辛気臭い話するが、必要なことだから文句言つなよ」

なんだそれは、と僕は彼を横目で見る。彼は窓の外を眺めながら呟くように言った。

「俺さ、芹沢を傷つけんかって言っただろ？ どうしてか解るか？」
「知ったことか。そもそも芹沢さんを傷つけるなんて濡れ衣だ、僕はそんなことしない。絶対に」

その話が、と思いつつ僕は彼同様に窓を見た。ビルが高速で流れていく。

彼は僕の答えに頷いてみせ、続けた。

「お前は少なくとも悪いヤツじゃないからな、故意にそんな事はすまいよ。けどもお前、精神的に柔なトコロがあるからな」

彼は窺うように僕を見た。僕は無言で続きを促す。電車がゆつくりと減速し、停車した。僕らの下車駅はまだ先だ。

彼はちゃっかり空いた席に座り、続きを話す。

「芹沢のようすに気付いてないのはよっぽどだな。お前、彼女がどんな気持ちで橋本をつつたと思う？」

僕はなお無言。だが先程と違い、回答を持ち合わせていないが故の無言だ。

彼は初めから答えを期待していなかったかのように続ける。

「だのにお前、本当に何事もなかったように『普通に』芹沢と接してるだろ。それが逆に芹沢を追い詰めてるんだ。その証拠に」

ほれ、と言いながら僕を顎で示した。

「お前を誘ってないだろ。実はお前が誘ってて断られてたとかは知らんが、現に今一緒に居ないな。そいつが証拠だ」

僕は彼をねめつけ、低い声で問いならぬ問いを發した。

「ずいぶん詳しいな。芹沢さんが言った台詞までそっくり把握してるって感じの話だぞ今の」

「あ、言ってなかったか？ 俺の彼女って、芹沢の親友なんだぜ」

初耳だ。なんだその都合のいい裏設定。そして自分の言った内容をそのまま友達に横流しするって何がしたいんだ芹沢さん。

「そう胡散臭そうな顔すんなって。芹沢だって自分の行動が良かったのかを誰かに相談したかったから話したんだろ、きつと」

「……さあ、どうかね」

僕は適当に返しつつ、誰か座るだろうと気を使って座らなかったが結局誰も来ない空き席に腰掛けた。

そして適当に目線を動かし吊り広告を見るでもなく見回す。彼はそれを咎めもせず自分の話を続けた。

「ともかく。芹沢はお前を気に入ってな、フットとはいえ親友くらいには思ってる。つまり俺の彼女と同じ椅子だな。憎いなおい」

「話が脱線してるぞ」

僕はやれやれと突っ込んだ。彼はおっと危ねえなどとほざき、話を続ける。

「芹沢の親友勢はみんな恋人との同伴集合だから、本来お前を誘わないはずがないんだ。それなのに誘われない。今のお前はそれくらい嫌われてる。嫌われてるつつつか、引け目を感じさせるとでも言おうか」

詳細はともかく芹沢さんが僕を避けてるってコト自体はとうに知ってる。僕はぶっきらぼうに言った。

「要するに何が言いたい。お前は僕に芹沢さんがいかに僕を疎んじているかを改めて言うために僕とここに居るのか？」

だとしたらさすがに怒るぞ、と思う僕に彼は苦笑を返した。

「まさか。そんな馬鹿馬鹿しい事をするために彼女との貴重な時間を割くかよ」

確かにそうだ、と何故かそこで納得した僕に彼は、いいかよく聞けよ、と前置きして言った。

「今はひどく嫌われてるが本質的には芹沢はお前に好意を抱いてる。つまりお前の行動態度如何で芹沢の好感度バロメータが変動するんだ」

恋愛ゲームみたいに言いやがった彼を横目で睨みつつ僕は嘆息した。要点を確認する。

「芹沢さんに親切にしろってことか。別にそんなこと言われずとも言い掛けた僕を簡単な肯定とともにさえぎった。」

「まあそうだが、少し解釈が間違ってる。いいか？　よく聞け、これこそ耳の穴をかつぽじってよく聞けよ？　この講釈のメインどころはズバリここに集約されてるんだからな」

「はよ言え」

僕は急かす。彼は聞いていなかったかのように反応を見せず、だがつた。

「まだ芹沢にはコクってない状態だ。だからこそ、まだ望みはある。さり気なさを以てアピールを続けて、ガツンといけばきっと落とせる。いいか、つまりだ」

男ならいつまでもウジウジせずに、根性見せて告白くらいキチンとしとけ。

彼が言いたいことは、そういう事だった。

回り道にも程があるうというくらいにクドクドと大回りをして、それで本題はたったそれだけ。バカらしくて思わず笑ってしまうが彼のそんな説明下手さ加減が逆にその言葉を僕の脳裏に染み入らせた。彼の恋人がそこまで計算して彼を寄越したのだとすれば、ちょっと凄い。

でも、おかげで僕はこう思うのだ。

「これで世界が終わるとしたら、最後になるとしたならば、告白すら出来ずに終わってしまうのは絶対に後悔するだろうね」

終わらないなら、玉砕したなりに失恋の悲しみを噛み締めよう。自棄酒でもやってみようじゃないか。

僕がそう言ったら、彼は安心したように目を細めて、

「自棄酒って、バツカ、犯罪は止めるよ」

そう言うのだった。

そして電車は幾度目かの減速、停車する。ここが僕らの下車駅だ。降り立った駅舎の上に広がるのは、うそ寒いくらい突き抜けた冬晴れの空。

世界が終わる少し前<:下>;

その後バスを經由して遊園地に着くと、彼はフラフラと恋人を探して居なくなってしまった。辺りには見知った顔が集まっており、結構な人集りを形成しているので僕はあまり動かないことにした。クラス会とはいえ、みんなそれぞれの恋人を招いているので単純に二倍近くまで参加人数が膨れ上がる。

当初、みんなで固まってアトラクションを楽しもうという案があった。幼稚園の遠足じゃないんだからそんなことまでしなくてもいいだろうと僕は思ったが、あのメッセージがある今、クラスの思い出としてみんなで行動という案が通りかけたものだった。

しかしこの人数では却って邪魔になろう。結局否決されて良かったと思う。

「お早よ」

と、立ち尽くす僕に声が掛けられた。振り返って見ると、芹沢さんが片手を小さく挙げて立っていた。オレンジのダッフルコートに白のマフラーと手袋がとても似合っている。見とれるのもそこそこに僕は挨拶を返した。

「お、お早よう」

ヤバイ、どもった。

くそう、改めて告白しようなんて思い立ったから変に意識してきちゃって、緊張してきたらしい。

「人多いね。私の友達なんてみんな恋人居るから、取り残されちゃったよ」

「そ、そうなんだ」

ダメだ、頭がなんかピンク色に染まってうまい返しが思いつかない。せめて真っ白になってくれよ僕の頭ん中。

芹沢さんは僕の拳動不審ぶりをようやく不審に思ったらしく訝しげに訊ねてきた。

「どうかした？　なんか変だよ。風邪でも引いた？」

「いや別に特に異常はありませんが」

ウワー！　何敬語になってんだ僕？！

いよいよダメだ、芹沢さんの心配そうな顔がキュート過ぎて思考が毒されてきた。しばらく頭が硬直してたりバウンドが今ここに！

と、周囲の人波が方向性を持った。芹沢さんの視線がそちらに向けられ、ホッとしたのも束の間。

「あ、開いたみたいだよ。行こう、橋本くん」

「うん」

返事が短すぎたかな、と心配になる僕をよそに芹沢さんは楽しそうな足取りで遊園地へとずんずん歩いていく。それを見て僕は思わず微笑んだ。

芹沢さんも楽しみなんだな、遊園地が。

一旦園内の邪魔にならなそうなトコロにみんなを集めて、適当に注意事項等を述べたあと一応は自由行動で解散ということになった。だが一同はなかなか散開せず結局いくつかのグループに分かれモタモタとみんなでアトラクションを楽しもうという雰囲気になっていた。いつのまにか。

かくいう僕も芹沢さんもグループの一員となってプラプラと楽し

んだ。幸い僕達のグループには過激なアトラクションが苦手という人が集まっており、穏やかで堅実なアトラクションを回った。

ちなみに、腐れ縁の彼のグループは逆に過激なアトラクションが大好きなグループだったらしく、絶叫マシン類のなかでも一際コワイアトラクションをハシゴしているらしい。彼からそんな悲鳴じみたメールが来て、子供向けアトラクションに乗りながら芹沢さん共々笑わせてもらった。

そして密かに僕はそのグループでなかったことに深く安堵するのだった。

「あ、ゴーカート」

最初にそれを言ったのは誰だったか。

やがてみんなでゾロゾロとゴーカートに乗ろうと列を形成した。これは遊園地を丸一周する長距離を走れるゴーカートらしく、思ったより人気で同時に時間も掛かった。僕達の番が回ってくるまでに三十分強かったのだ。もう乗り終え、グループみんなの終了を待つ人々と他のグループが合流を果たすほどだった。

そして待ちかねた僕達の番がやってきた。やかましいエンジン音を立てるそれは二人乗りで、傍らに居るのは芹沢さんで……、などと僕が考えているうちに芹沢さんが僕に言った。

「私運転しなくていいよ。きっと壁にぶつけまくっちゃうし」

「そうかな、じゃあ僕が」

僕がどうするの？

僕は状況をまだ飲み込めていなかった。しかし芹沢さんは頷いてナチュラルに助手席に乗り込み、コチラを見上げる。

……どうやら先程の状況が解らないなりに放ったテキトーな発言のおかげとは言わないが、僕が運転することになったらしい。

まあ、結果オーライか！ と僕は自分にイイワケして運転席に乗り込んだ。右がアクセルだよな。

「橋本くん運転大丈夫？」

芹沢さんが笑いを含んだ調子で訊ねてきた。この際別に僕が運転下手でもよさそうだったが、あいにくとこう見えて僕は、

「こう見えて僕は結構運転うまいつもりだよ」

芹沢さんがへえー、と返事してるのを聞きつつ僕は母親が教習所で習ったといい、日々念仏のように唱えていたことを確認する。

右よし、左よし、上（信号）よし、下（ペダル、サイドブレーキ、メーター類、ギアなど）よし！ もう一度左右確認、よし！

と、見回してみるけれどゴーカートにはそんなチエックするような箇所なんてアクセルペダルがどっちかくらいのものである。無意味なことをしたことに気付く僕は沈黙した。

係員が『どうぞ』と言うのを耳の片隅に覚えつつ僕はアクセルペダルをゆつくりと踏み込んだ。カートはスルスルと滑るように加速していく。

「うーん……。確かに凄く運転上手いんだけど、なんか地味だねえ」

芹沢さんが笑いながらぼやいた。僕は唸る。確かに他の人なんかはいきなりアクセル全開にしてドカンとばかりに蹴り飛ばされたようなスタートだったから、スマート過ぎる通常の安全運転は面白みに欠けるかもしれない。

「ところで、今ってアクセル全開？」

芹沢さんが風に髪をなびかせながら訊いてきた。僕は踏み込み具

合を確認し、素で返す。

「いや、多分七分くらいじゃないかな」
「ブツ」

突然芹沢さんが吹き出した。かと思えば急に体ごとコチラを向いて平手ではしばし叩いてくる。

「なんでよ！？ フツー全開でしょゴーカートなんだから！」
「うわっ、ちょ！ 危な、狂う狂う手元が狂う！」

フラフラと蛇行したカートはとうとうガガガッ、と壁にバンパ―を擦り付け激しく車体を振動させ、大幅に減速した。原因を作った芹沢さんが思い切り悲鳴を上げる。

僕は一旦アクセルを放してブレーキを踏み、カートを停止させる。左右の林が風に揺られザワザワと鳴った。僕はやつれた声で問い掛ける。

「……最高速度で、いいんだね？」
「うん、そのほうが楽しそうじゃん」

了解、と返して僕はハンドルを切った。

「きゃはーっ！ 酔う酔う酔う！ かっ飛ばせー！」

今度はアクセルを限界まで踏み込んで走行している。カーブのときにスピードを緩めなくても大丈夫な程度の速度しか出せないのだがカーブの度に気を使う。低いコンクリ壁に衝突するのはもう懲り

た。

芹沢さんはカーブの度に振り回されて言葉通り酔いそうだった。僕はちらちらと芹沢さんと前とに視線を動かしながら言った。

「芹沢さん、カーブは振り回される方向と逆に体を向けると酔わないよ。カーブの内側に体を傾けるふうにするというらしい」

「へえ、……こんな感じ？」

言うてすぐにカートがカーブに差し掛かり、芹沢さんは早速履行した。訊いておいて勝手に頷き、納得する。

「確かにちよつと楽かも」

「かつてテレビが言ってたことは確かなんだなあ」

僕が調子いいことを言いながらハンドルを切る。芹沢さんは神妙に唸って、体を傾けた。と、落ち葉がヒラヒラと舞っていたかと思っていたら

「ぐはっ？」

「プッ！ あはははは」

枯葉が僕の額と正面衝突した。僕は枯葉の『ぺち』という感触に驚いて思い切り仰け反ってしまう。そんな僕を芹沢さんは指差して大爆笑していた。僕はむっつりと緩めてしまったアクセルを再び踏み込む。

そんなふうに楽しくドライブを楽しんでいたが、気付けばもう終わりだった。乗降口が見えてくる。僕がアクセルを緩めて走っていると、係員のひとが寄ってきてアクセルペダルをロックした。これで僕の運転は終わり、係員が慣れた手つきで乗降口までゴーカートを運び僕達を降ろした。

「——ふう、助手席も案外楽しいね」

芹沢さんが伸びをして、脱力の後に僕に言った。僕は運転をたっぷり楽しんだので余韻が体に残っていることを感じながら笑って返した。

「それは良かった。僕の運転はどうだった？」

「まあまあじゃない？」

訊ねる僕に芹沢さんは笑顔を返し、酷評を下した。ちょっとへこむ。

と、にこにこ笑顔を浮かべて弾むように歩いていた彼女がふと足を止めた。僕はどうしたのかと彼女の顔を見る。彼女は驚いたように目を見開いていたかと思うと、つらそうに顔を逸らした。

僕は顔を前に向け、彼女が見たものを探す。簡単に見つかった。

クラス一美人の女子に笑いかけてる軽薄そうなハンサム男。背が高くしつかりした体躯。フリーの女子や他人客の視線を一度くらいは引き付ける美男子。

倉橋だ。

どうやら彼は別グループで回ってたらしいがゴーカートに興じているうちに合流してしまったらしい。倉橋は本来余所のクラスだが、このクラスの人と付き合っていてこのクラス会に招かれていたのだろ。

招いた人を責めるつもりはないが、やりきれない気持ちもある。

「芹沢さん、どっかで座って休もうか」

「……ん、うん」

芹沢さんは僕の提案に頷いた。僕は彼女を促しベンチへと歩いて

いく。誰もそれを見咎めはしなかったし、倉橋は芹沢さんに気付きもしなかった。

芹沢さんをベンチに座らせ、僕は飲み物を持ってくると言い残し立ち去った。少しくらいは、一人で居たいだろうと思ったのだ。

メリーゴーラウンドのすぐ脇にあるベンチなので、ファンシーなメロディーが流れている。場所の選択をしくじったかなと心配になるが、あまり遠くまで歩かせるのも不粋かと考えるのを止めた。自販機に五百円玉を投入し『あったかい』なるコーナーからテキトーに選んで押した。外より割合高いが仕方あるまい。

温かい缶を取り出すとベンチへと取って返す。芹沢さんは居なくなったりする事無く素直に座り込んでいた。俯いたその様子は少し寂しげで、知らず僕は足を速める。

僕は芹沢さんの前に立ち缶を差し出した。

「はい、温かいやつ」

「……ありがとう」

芹沢さんは受け取り、缶の温かみを噛み締めるように両手で握った。僕はその傍らに付かず離れずの距離で座る。背もたれに体を預けて、空を見上げた。今朝と変わらず晴れ渡った青空である。

と、芹沢さんが消え入りそうな声でつぶやく。

「……私……ダメなの」

「え？」

僕が聞き返すと、彼女は切ないような困ったような曰く言い難い微妙な笑顔で僕に振り向いた。

「私、コーヒードメなの。全然呑めなくて……」

「えっ！？ ウソ、本当に？！ うわ、ゴメン全然知らなかった！」

僕は本気で焦りまくる。モノスゴク余計な事をしてしまった。

僕の焦り様に芹沢さんは大笑いし、身をよじってお腹を抱えた。

「コーヒーを落としてしまい、笑いながら『缶落としちゃった』と言うものの拾う余裕はないらしい。ガクガクと震えるばかりで拾う気配がない。」

落ち着いた僕が慥然として缶を拾うと、ようやく芹沢さんは笑いを収める。

「はー、笑った笑った。ふふ、それ橋本くんが飲みなよ」

「……そうするよ」

僕は缶のプルタブをこじ空け一気に呷る。自分の分けておいて良かったと思う。二人分飲むほど僕の咽喉は乾いていない。

僕がまだ温かいコーヒーを飲み下したのを見届けた芹沢さんは、ある方向を指差した。僕は首を捻ってそちらのほうを見る。

「絶叫系……？」

そこらは、絶叫マシン系のアトラクションがある方向である。僕の背筋をイヤナヨカンが駆け抜けた。

芹沢さんはにっこりと笑顔を浮かべて言う。

「行こっ！」

悪魔の一声だった。生まれて初めて彼女の声を恨めしいと思った。スキップで歩きだす彼女の背を追って、僕は複雑な気分で歩きだした。

某日・メールでのやりとり（前書き）

これはメール行われるやり取りのため、通常とは異なる表記方法を取っています。御了承ください

某日・メールでのやりとり

『Sub:無題

お早よう。起きてる？　って、私は寝てるけど。ゴロゴロー）
笑）

それとはかく、昨日は楽しかったね』

『Sub:Re

起きてるよ。今日も元気にヒマしてます。
確かに、昨日はホント楽しかった。けど、最後に絶叫系ばかりなのはつらかったかな』

『Sub:Re2

私はちよつと物足りなかったかな？　まあ橋本くんが本気で拒否
つたからね

「絶叫系はホントにダメなんだって！　マジでリアルにジョーダン
抜きで！」

って泣きそうな顔でw』

『Sub:Re3

なんかそれひどいなあ。人には誰にだって苦手なものはあるんだ
よ？』

『Sub:Re4

知ってますーw

てゆーかそろそろ起きようかな』

『Sub:Re5

言う前に起きようよ。もう11時だし』

『Sub:Re6

はい、起きましたー。でもテレビが面白くなーい。やっぱ寝ようかな?』

『Sub:Re7

起きたなら寝ないでいようよ。

ところで、休み明けテストの勉強してる?』

『Sub:Re8

は? 誰に訊いてるのかしら? ワタクシ、勉強とかいうシロモノとは無縁の生活を送っていますの。オホホのホ』

『Sub:Re9

誰?(笑

ていうか、早く始めた方がいいよ。範囲広いし。僕は今数学やってる』

『Sub:Re10

芹沢様ですわ(笑)

だから勉強なんて知らないんだってば』

『Sub:Re11

じゃあ芹沢様に教えてあげるよ。数学と理科社会の学習内容全てと、国語の百人一首、英語の読解』

『Sub:Re12

わー! わあー! 言わないでいいのに!! お陰で思い出しちゃったじゃんかあ』

『Sub:Re13

あはは。

でも、今時百人一首の暗記なんてセンス無いね。嫌だなあ』

『Sub:Re14

まあ渡辺だからね、仕方ないよ。私プリント速攻で処分しちゃったからコピーさせてもらわなきゃ』

『Sub:Re15

ごめん、お昼ご飯食べてて遅れた。

ダメじゃん。僕はまだ保管してるよ。ぐっしゃぐしゃになってるけど……』

『Sub:ゴメン！

ゴメン、私も昼食食べて遅れちゃった。

あるだけいいじゃん。でも私、暗記は死ぬほど苦手なんだよね。嫌だ』

『Sub:Reゴメン！

僕もホント苦手。本番でのド忘れがすごいひどい』

『Sub:Re2ゴメン！

私なんて壊滅的。もはや文字をなぞるだけで頭に入る余地が無いもん。歴史は得意なのになあ』

『Sub:Re3ゴメン！

でも、少なくとも僕よりは出来るでしょ。芹沢さん頭いいし』

『Sub: Re4 コメン！

ありがとうー。でも、国語の暗記だけはダメなのですよ。なんか、勝手が違うつていうか』

『Sub: ムキイー！

ちよつと橋本くん、鹿島知ってる？ アイツがさあ、彼氏とデート中とか自慢メール送ってきやがったのよ！ ヤなやつよねえっ』

『Sub: Re ムキイー！

鹿島さんっていうと、確か芹沢さんの親友だっけ。その『彼氏』は、僕の友達だよ』

『Sub: Re2 ムキイー！

そうだったんだ！ 知らなかった。

よく夜遅くまでメールやってるけど、たまに自慢メール送ってくるのが玉にキズなのねえー』

『Sub: Re3 ムキイー！

僕のトコにも来た。彼氏からの自慢メール。ご丁寧にも写メ付きだよ』

『Sub: Re4 ムキイー！

やんなっちゃうねえ、ホントにもう。

ところで、橋本くん今何してる？』

『Sub: Re5 ムキイー！

何もしてないよ。寝転がってメールしてるくらい』

『Sub: Re6 ムキイー！

そっかあ。私もだよ。

なんか、暇だよねー。私休み中何にも予定無し超暇なんだよね

「Sub:Re7ムキィー!

僕も予定は一切無いよ。暇で死にそう。寝過ぎで首が凝ってきたし」

「Sub:Re8ムキィー!

じゃあさ、暇人同士どっか行つてなんかしない? 明日明後日あたりなさ」

「Sub:Re9ムキィー!

勿論いいよ。大賛成。でも、提案が曖昧過ぎだね……」

「Sub:Re10ムキィー!

決定だね!

なーんにも考えてないからね。暇人は慢性的に思考停止なのでーす」

「Sub:Re11ムキィー!

その暇人つて僕も入ってるよね……。なんだかなあ

これから夕食の買い物に行くから小一時間程メールできなくなるかも」

「Sub:Re12ムキィー!

買い物なんか行くんだ? 偉いねえ」

『Sub:無題』

鹿島里佳、可及的速やかに応答せよ』

『Sub:Re』

どうしたの?』

『Sub:Re2』

明日明後日あたりに橋本くんと遊びにこういう話になったんだけど、どこがいいと思う? 大体一時間くらいで結論出してきたいの』

『Sub:Re:Re2』

あれ、橋本くんって、フットじゃなかったの?』

『Sub:Re2:Re2』

フットっていうか、あれはまあ……。とにかく、フツの友達として遊びにいいのかなー、って』

『Sub:Re:Re2:Re2』

』

『Sub:Re2:Re2:Re2』

空メってなによ。迷惑メール?』

『Sub:謝罪』

ゴメンゴメン。呆れのあまり何を書く前に送信しちゃった。
あんたひとつといわね。まるで悪魔。自分で何やってるか分かってる?。』

『Sub:Re謝罪』

遊びに誘った。なにか問題あるかな？ 友達で居ようって言うてあるよ？』

『Sub:Re:Re謝罪

サイアクじゃない。フラれた相手にデートに誘われるなんてどう思つか』

『Sub:Re2:Re謝罪

デートなんて！ そんなつもりないよ？』

『Sub:Re:Re2:Re謝罪

あんたの主観的事実がそうであろうと客観的事実、つまり橋本くんが受け取る事実はまるきり『デートの誘い』でしょうが。

アンタは異性同性関係なしに友達友達ってツラで付き合えるけど、みんなそうってわけじゃないんだからね。むしろアンタの方が希少だわ。ついでに無神経で後先考えずモノ言うし』

『Sub:無題

んなこと言われても困るんだけど……。

っていうか、もう橋本くんからメール来ちゃったし。本題から掛け離れちゃったよ！ 役立たず！』

『Sub:Re

あんたねえ、その言い草はないでしょ？！

あと、橋本くんの親友である私の彼氏から伝言貰ったよ。行くなら明後日にしておけ、って』

『Sub:Re2

分かった。いったん止めるね』

『Sub:Re

橋本くん、おかえりー。今晚の献立は何？』

『Sub:Re2

鰯大根だよ。……っていうか、訊く必要くない？』

『Sub:Re3

ノリですよ。』

ところで、遊びに行く件だけどさ。明後日でいい？』

『Sub:Re4

全くの無問題だよ。何するか考えたりした？』

『Sub:Re5

……いえ全く……。

どこがいい？』

『Sub:Re6

どこ、って言われてもなあ……。誰かと遊びに行くなんて半年くらいぶりだから見当もつかない。芹沢さんの好きに決めていいよ。言い方は悪いけど、結局は暇潰しだからどこだって問題ないし』

『Sub:Re7

うーん、それじゃあ当日までになにか考えておくね。集合は九時いつもの待ち合わせ場所で！ あ、九時って言ったからには解るだろうけど、お昼は行き先で食べるから』

『Sub:Re8

うん、分かった

世界の終わるちょっと前 上

そして、朝。

僕は朝の鳴動をする携帯にのっそりと手を伸ばし、携帯を引っ掴むなり外気温の寒さからすぐさま布団のなかに手を引っ込めた。適当にいじってアラームを止める。

しばらく布団のシーツを眺めつつ気合いを入れ、思い切って起き上がる。その部屋の寒いこと寒いこと。僕は何より先にエアコンをつけた。

エアコンをそのままに階下を下りる。眠い目をこすり廊下の寒さに小さく震えながら、ダイニングに入った。ソファに座ってテレビを観ていた母さんが僕を見て驚く。

「あら、どうしたの？ こんな朝から。 なにか用事でもあるの？」

「うん、まあ。 ちょっと友達と遊びに」

ふうん、と彼女は納得したように鼻を鳴らし、戸棚を示して菓子パンがあるから朝食代わりに食べるよう言った。僕は素直に頷き、戸棚から餡パンを出して封を開け食べる。食べつつ冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注ぐ。

餡パンを半分ほど平らげ牛乳を飲みながら時計を見る。壁掛時計の示す時間は、八時二十六分。約束の九時にはまだまだ十分余裕がある。

僕は最後の一塊を口に放り込むと牛乳で流し込む。そしてコップをシンクで水に浸け、餡パンのビニールをごみ箱に押し込んだ。リビングダイニングを後にして洗面所で歯磨き洗顔を行う。冷水で顔を洗うのは結構つらいが、お陰で目が覚める。傍らに置いてあるタオルで顔を拭いた。

ふう、と一息吐く。そしてふと鏡に映る自分を見て、寝癖が無い

ことを確認。洗面所を出てトイレにて用を足し、自室に向かう。室内は既にすっかり暖まっていた。

僕は寝巻のスウェットを脱ぎ、昨日決めておいた服に着替える。インナーやトレーナーは適当だが上にセーターを着込むので関係ない。下はジーンパンで無難に済まし、カーキ色のジャンパーを上着に着る。カバンには持ち運びが楽な肩に掛けるタイプのものをセレクトした。

「まあ、こんなものかな」

身なりを整え、僕は独りごちた。財布の中身を確認し、シンプルなホルダーが一つ付いただけの家の鍵をカバンのポケットに滑り込ませ準備は完了。ジャンパーのポケットから携帯を取り出して時計とメールを確認した。まだまだ余裕がある。

僕は暖房を切り、寒い玄関に向かう。揃えて置かれたスニーカーを履いて家を出た。外の空は、雲の目立つ晴れである。

僕はのんびり歩いていった。時々思い出したように風が吹き道端に溜まった枯葉を転がす。

と、不意に携帯が素っ気ない電子音を響かせて鳴動しはじめる。僕は携帯を取り出して見た。腐れ縁の彼から電話だ。こんな朝から珍しい、と思いつつ僕は耳に当てる。

「もしもし、橋本ですが何用？」

『はよっす、もう起きてんのか。てかイエデンじゃないんだからその名乗りはないだろ』

彼はいきなり僕にケチをつけた。僕は携帯を片手に左右を確認しつつ、ややイラつきながらも声は穏やかに催促する。

「解ったから。で、何の用なんだよ？」

『ああ、そうそう。お前、今日デートだろ？』

脈絡なく彼が確認する口調で聞いてきた。僕は深く嘆息する。

「また……。芹沢さんは口軽いね。秘密なわけでもなかったけどさ」
『はは、まあそう言うな。お前さ、デートの待ち合わせには約束の時間より早めに行くんだぞ？』

僕は足を止め、彼の言葉を疑問に思い尋ねた。

「もしかして、待ち合わせの時間知らない？」

『あ？ 知らないけど、どうかしたか？』

僕は意味もなく頷き、苦笑する。電話口に告げた。

「九時、だよ。もう待ち合わせ場所にいる」

電話の向こうで時計を見る気配。荒い息遣いが受話器越しに聞こえ、彼は言った。

『十分前じゃん、少し遅いぞ。三十分前に居とけ。芹沢は居ないのか？』

「は？ 居ないよ」

僕はとりあえず答える。そうか、と彼は答えて唐突に話を変えた。

『今日コクるんだろ？ 頑張れよ』

「あ、な……！ お前さあそういうこといきなり言うなよ！」

ははは、と妙に爽やかな笑いを響かせる彼は僕に答える。

『まあまあ。俺は応援してるぞ、頑張れよ』

彼の言葉にどう返そうかと僕が悩んでいると、脇から声がした。

「橋本くん？」

「あ、うわあ？！ あ、な……お早よう芹沢さん！」

芹沢さんが来ていたことに全く気付かなかった。不覚である。
受話器の向こうに居る彼は気付いたらしく、別れの言葉を残して切った。僕は苦笑いを顔に張りつけたまま携帯を閉じる。

「いいの？ 誰から？」

「あー、いや。いいんだ、大丈夫」

芹沢さんが気を使っているので、僕は携帯を軽く振って何でもないふうを表現する。ついでにマナーモードに設定した。

「ふうん？ まあ、いいってんならいいけど」

そう言っただけ芹沢さんは足をとんとんと弾ませた。僕はその動きに釣られるように彼女の全身を眺めてしまう。

今日の芹沢さんは、深みのあるグリーンの上着を召しており、上着の部分から覗く淡いベージュのインナーが落ち着いた雰囲気を引き立てている。スカートは長めで足首まである。ピンク系だが派手過ぎず、上下で上手くまとまっていた。彼女の手につけ爪もシックなデザインで、全体的にとっても大人っぽくなっている。

普段の彼女はどちらかと言えば明るく活動的な雰囲気を感じるので、今日の落ち着いた芹沢さんはそのギャップからかより綺麗に見える。

僕は男らしく覚悟を決めて感想を言うことにした。

「あー、その。芹沢さん、……その服似合うね」

僕の急な言葉に彼女は目を丸くしたが、にっこりと微笑んで返した。

「……ありがとう！」

その笑顔は輝いてさえいるようで、それを見る僕は自分の想いを再確認する気持ちだった。僕は極上の笑みを見せてくれた彼女に精一杯の微笑を返し、そっと告げる。

「じゃあ、行こうか」

「うん、行こう」

言葉を交わすと、どちらともなく歩きだす。目的地は迷いなく歩いている芹沢さんが決めたのだろう。僕達は付かず離れずの距離を保ってまだ寒い朝の道を歩いていった。

世界の終わるちよつと前&1t;下>

電車に十分ほど揺られ、やってきたのは繁華街。もう年の瀬だといふのに、周囲は人で溢れざわめきは絶えない。

傍らを歩く芹沢さんも左右を見回して感嘆のため息を吐いた。

「思ったより人多いね」

それに対し、僕は頷くだけにとどめる。下手に声を出すと上ずり
そうだと。

芹沢さんは僕の半歩先を歩き、迷いの無い足取りでどこかに向かっていた。僕は今日の予定を全く知らないことに気付き、芹沢さんに尋ねる。

「芹沢さん、今日なにをするの？」

彼女は振り向かぬまま手を後ろで組み、答えを探すかのように辺りを見回した。そしてようやく振り向き僕に答える。

「シー、ぶっちゃけあんま決まってるない。思いつかないもんだね」

僕はなんと言つていいか分からず、取り敢えず乾いた笑いを上げた。あんまりズンズン歩くもんだから、てつきり行き先が決まつてるのかと思つていた。

芹沢さんは前を向き、悪怖れもせず続けた。

「歩いてるうちに思いつくかなって思ったけど、芳しくないかも」

僕は唸りながらちょっと考えたが、思いついた案は全て自己否決

した。肩を竦め、歩みを少し早めて芹沢さんに話し掛ける。

「芹沢さん、なにかしたいことある？」

「うーん……」

芹沢さんは腕を組んで唸り、考え込む風を見せる。そして思いついた案を片っ端から述べた。

「買い物は今更したくないし、カラオケも年の瀬っぽくなくてヤダ。ボーリングやなんかは二人でやるにはつまらないし高いしー、何があるかなー」

僕が口を挟む間もなく彼女の思考は自己解決を繰り返して、行き詰まった。

そして再び辺りを見回し始めた芹沢さんだったが、その目がふとある方角で留められた。遅れて僕もそちらに目をやる。

そこは映画館の上映演目が貼られた壁面だった。趣向の凝られたいくつものポスターが衆人に見目にも鮮やかな宣伝をしている。

芹沢さんがそれを見ながら考え込むふうに呟いた。

「映画か……。うーん、どうしょ？」

「僕は別にいいと思うけど」

僕の言葉に芹沢さんは意を決したように頷き、僕を振り向いて言った。

「じゃあ、映画観よっか」

「うん。でも何観るの？」

芹沢さんはポスターのほうに顔をやるが、ふと気付いたように再

び僕を見た。

「橋本くんはなにか観たいのある？」

「いや、特に無いけど……ホラーは遠慮したいかな」

僕は言っていて情けなくなってくる。我ながらこんなみつともない男でいいのだろうか。

それを聞いた芹沢さんは堪えきれないというふうに笑う。

「なんか橋本くんて怖いホントダメなんだね。里佳みたい」

「里佳っていうと、鹿島さんだよ。鹿島さん怖いダメなんだ？」

「まあね。でも、何故か絶叫マシンだけは好きなのよねあの子……」

と、思案げに俯く芹沢さん。彼女はすぐに顔を上げポスターの一つを指差す。

「ともかく、私見たいのアレ。なんか面白そう」

僕は彼女の指したポスターを見る。少なくともホラーではなさそうだった。

僕はそれだけ確認すると同意する。別に見たいものがあるワケでもなく、彼女の意見を尊重したい。

「それじゃ早速チケット買おうか」

芹沢さん先導でチケットを購入。運がいいのか悪いのか、開演直前でチケットを貰うなり駆け込まなければならなかった。

「人案外居るねえ」

席を探しながら芹沢さんが声を潜めて言った。僕は頷く。劇場が小さいせいもあるかもしれないが、話題になってない割に席は埋まっていた。

芹沢さんがJの21を見付け、座る。僕は彼女の隣だが、芹沢さんが先に座ってしまったので仕方なくまたいで通った。芹沢さんが苦笑しつつ、席に着いた僕に言う。

「ゴメンゴメン。でも言ってくれればどいたのに」

「ああ、そっか。ゴメン」

退いてもらうという選択肢は頭に無かった。どうも僕はなににかにつけ相手に合わせてしまいうらしい。

その時証明が落とされ、辺りが薄闇に包まれる。

「始まった」

芹沢さんが小声で呟く。

スクリーンの投影が始まったと思った直後、爆発するような大きい音とともにファンシーなキャラクターが注意事項を分かりやすく述べて、続いてコーヒーマーのCMや映画の宣伝が入ると、ようやく本命が始まる。その頃には映画館の音声に慣れてきていた。

始まったそれはゆったりした雰囲気から突然主役の環境が変化し戦場に巻き込まれるという、ある種陳腐なものだったが段々物語に飲まれていった。

クライマックスの主役が恋人を助けたすシーンは、失敗したと思っていたのに思いもよらない奇跡によって恋人が助かったというのが意表を突かれた。

そして気付けばエンドロールが流れはじめ、観客がばらばらと立ち上がり帰り始める。芹沢さんも神妙な顔をしてその列に加わり、

僕達は劇場を後にした。

「結構面白かったね」

「うん、そうだね。面白かった」

芹沢さんとそんなことを話しつつ、ちょうどお昼時になったのでファーストフードで昼食を取る。

食後もぐずぐずと居座って、映画の話をした。

芹沢さんがコーラのストローから唇を離し、頬杖を突いて言った。

「序盤のほう、大抵安い映画ってダラダラと長いけどすぐに戦闘に入ったのは良かったよね。私いつもそういう序盤で眠くなっちゃうから」

「そうなんだ。僕は音がうるさくて眠れないよ」

僕の言葉に、ナプキンで鶴を折っていた手が止まり芹沢さんが上目遣いで僕をにらむ。

「む、悪かったね。どーせ私はニブいですよ」

上目遣いでにらむ顔が可愛いのににらまれていることそれ自体に動揺して僕はドギマギしながら、摘んだポテトごと手を振る。振った拍子にポテトがへにや、と折れた。

「違うよ、別にそういうつもりで言ったわけじゃなくて……」

弁解するあいだじゅうポテトごと手を振っていたためか、折れていた部分から千切れた。

「……あ」

芹沢さんはつまらなそうに、片手で頬杖を突いたまま机に墜落したポテトを指差して

「ポテトがポテツと落ちた」

しれっ、と超お寒いことを言い放つ。

「……………」

「……………くう……………」

どう対処すべきか考えあぐねる僕の正面で、彼女は喉を鳴らし俯いた。双肩がびくびくと震え、笑いを噛み殺しているのがはた目にもよく分かる。

「……………自爆？」

しかもそんなつまらないジョークで。

芹沢さんは笑いを堪えて上気した顔を上げ、手で空間を軽く押さえるように上下させ『どう、どう』とやった。

「はー、危ない危ない。もう少しで自分のジョークに笑う危険人物になるところだったわ」

「ほとんどなったも同然だと思うけど」

「そこ、細かいことは気にしない！」

あれから小一時間粘ったのちファーストフード店を出て、やることもないので結局デパート等を冷やかして回った。

気が付けば日は暮れて、僕は帰るのが惜しい気がしていたが、芹沢さんが帰ろうと持ちかけてきたので僕はそれに従った。

そして電車で近い距離にある最寄り駅まで帰ってくると、僕達は街頭の下をのんびり歩いていった。空を見上げてても星は見えず、物足りない感じがする。

「なんか、帰るのが惜しい気がするね」

芹沢さんが唐突に言った。僕は彼女の顔を見る。

彼女は僕と同じように空を見上げていた。顔をおろし、僕と目を合わせる。

「うん、僕もそう思う。別にやりたいことがあるワケでもないのね」

「ね。なんでだろうね」

優しく微笑むと芹沢さんは再び空を見上げた。僕もそれに倣う。

「夜空に星が見えたらいいのに。私、星空好きなんだよね」

僕は思わずクスリと笑ってしまった。案外芹沢さんと僕は似ているのかもしれない。

僕は少し嬉しくなって、微笑みながら言った。

「僕も星空好きなんだ。いつかもう少し田舎の方に引っ越したいと思うた」

「あ、そうなんだ？　じゃあオススメの土地とか物件見つけたら教えてね」

芹沢さんは冗談めかしてそんなことを言う。僕は冗談に隠してし

つかりと、頷いた。

「任せてよ」

彼女はもちろん冗談のノリで軽く返す。

「任せたよ」

車がすれ違っていき、街頭を一つくぐった。静かな夜だ。と、一瞬空に青白い線が引かれた気がした。

「あれ？」

「ん？ どしたの？」

僕の呟きに芹沢さんが不思議そうに尋ねた。尋ねたと言うことは気付かなかったのだろう。

僕は顔を下ろして芹沢さんを見返した。ずっと空を見上げていたため、すでに別れ場所のＴ字路だと気付いていなかった。

僕のようにすから大したことではないと思ったのだろう、芹沢さんは微笑んで口を開いた。

「ん、それじゃあ……」

「あのさ」

僕は彼女を遮って言った。自分でもよく分からないが、アレに後押しされている気がした。

芹沢さんは特に気分を害した様子もなく続きを待っている。

「あのさ、ちょっと言いたいんだけど」

「ん、なに？」

僕はあー、とかうー、とか言いながら頭を掻く。緊張どころかか
つてないほど穏やかな自分の気持ちに戸惑っていた。

自分に踏ん切りを付けるため、意味もなくまあいいやと呟き、正
面から芹沢さんを見る。

「深く考えないで聞いてほしいんだ。オーケー？」

「おーけー、おーけー」

冗談かと思ったのか、芹沢さんはちよつと笑ってそう答えた。僕
は頷き、言った。

「好きだよ、芹沢さん」

へらつ、と笑った芹沢さんの顔は一瞬にして強張った。凍り付い
たといってもいい。

そして目が少しずつ見開いていき、同時に顔が紅潮していく。こ
れはまずい、果てしなく可愛い。

「え、あの、えと、私言っただじゃんムリだって。その……、はしも
とくん？」

「だから深く考えないで聞いて、って言っただじゃないか」

うるたえる僕の好きな少女に笑いかける。それを見たからか、彼
女は少し落ち着きを取り戻した。

「あの、これは、私はどうすればいいの？」

「いや、別にどうもしないでいいよ。気にしない、気にしない」

僕は笑って返す。不安そうな彼女のために、今まで通りにしてく

れると嬉しいかな、と付け足した。

なおも不安そうに芹沢さんは問い掛ける。

「へ、返事ってした方がいいの？」

「いらないよ、同じコト言わせるつもり無いから安心して」

対し、僕は笑顔だった。

いつかのような感情のこもらない笑顔ではない。思いを告げられた満足感と、それをちゃんと聞いてくれた芹沢さんに対する感謝で僕の胸は満たされていた。

芹沢さんは釣られるようにぎこちなく微笑むが、それはすぐに消えて真剣な顔になる。

僕は少し不安になった。これは、予想以上に芹沢さんを傷つける行為だったかもしれないと思うと、不安が噴出してくる。だが自分の撒いた種だ、どんな言葉でも甘んじて受けなければ、と僕は腰を引き気味に彼女の言葉を待った。

「あ、のさ……」

あ、でつつかえて言い直そうとしたら声が擦れたらしく、妙な間をつけて芹沢さんは切り出した。

「その、すぐはダメなんだけれど橋本くんが待ってくれるなら、その、ゆっくりだけでもなんとかして、えと、その、うん。付き合える、と……思う……けど、どうかな？」

顔を真っ赤にしてつつかえつつかえ、言った。顔を上げてられないらしく俯いて、時々下から窺うような上目遣いが凶悪だ。

上半身、特に首から上がかあっと熱くなった。僕も顔が真っ赤な

んだと思う。

頬を掻き、僕は頷く。

「もちろん、いくらでも待つけど……あ、うん」

それきり言葉が続かず、沈黙が流れた。

その時僕はほとんど忘れていたことを思い出す。

（もちろん待つけど……時間があるか分からないんだよなあ）

そう。この世界は今年で終わるかもしれないのだ。

すっかり忘れていた、今では非常に恨むべき状況に呪咀の念を送っている、

パン、と気合いを入れるように芹沢さんが自分の両頬を叩いた。彼女が上げた顔の、赤く染まった頬とどこことなく潤んだ瞳がとても綺麗だった。

僕が驚きから覚める間もなく、彼女は僕に向けて肘を真っすぐ伸ばして手を振り一方的に叩きつけるように言う。

「またね！ バイバイ！」

逃げるように走り去る彼女の背に引きつった笑顔のまま僕は手を振った。

そして体を返し家へと足を向ける。

「へ、へへ……」

先程のやりとりを思い出して一人ニヤつく。今が夜間でなければ僕は確実に変質者だ。いや、逆に夜だからなおさら変質者か。

芹沢さんの恥じらう表情が脳裏に去来しとてもいい気分になる。

『好きだよ、芹沢さん』

よけいな記憶^モまで脳裏にフラッシュバックしてきた！！

僕は自分のあまりのクサさ加減に悶絶した。夜間でなければ僕は確実に変質者だったと思う。

世界が終わる直前&let's上&get;

その日、僕は掃除に追われていた。

午前中に全部終わらせてまったりしようと思いきなり寝ることもせず掃除に取り掛かっているのだ。正月休みの両親も、やれなんて一言も言っていないのになぜか文句を言いながら手伝い始めたので、分担して掃除をこなしていく。

日も照ってきた十時ごろ、僕がこびりついたコンロ周りの汚れを睨んでいるときだった。

二階廊下の窓を担当していた母さんが声を放って来た。

「ちょっと、ケータイ鳴ってるわよー？」

「？ 何の用だろ」

僕のケータイに電話を掛けてくるヤツなんて腐れ縁のアイツしかあり得ないので、誰からの着信かは見なくても分かる。

僕は雑巾を調理台に置き捨てて階段をあがる。母さんがケータイを手にしており、手渡してもらう。僕は礼を言ってオープンザケータイ。通話ボタンを押して耳に押し当てた。

「もしもし、何か用？」

電話の向こうから聞こえてきた声は予想通り彼だ。

『ああ、お前今日暇か？』

「少なくとも今は暇じゃないけど」

『何してんだ？』

「大掃除。今コンロ周りの魔物と激闘を繰り広げようってところ」

電話の向こうから感心したような吐息。彼は掃除に対して大雑把なところがあるため、多分普段の掃除より一手間増やす程度のことしかやらないのだろう。

これ以上大掃除ネタを引っ張るとそのことを引き合いに出されると悟ったのか、彼はそれ以上の雑談を望まず、代わりに質問をよこした。

『何時ごろに終わる？』

「さあ……多分昼過ぎには終わると思うけど」

『あ、じゃあ大丈夫だ。二時半ごろお前らの待ち合わせ場所のＴ字路に集合な。ほんじゃ』

「待て待ちなさい待てよボケナス。何だって言うんだ」

急展開に付いていけず、制止の声で罵る。大掃除がどれだけかつたるい仕事か、ろくにやらないやつには分からないのだ。

『来れば分かる。つつかまだ最終決定してねえんだ。とりあえず芹沢も来るからいいだろ』

プツ、という音とともに電話は切れてしまった。僕は憮然としたままケータイの画面を見る。そこには今の通話時間が表示されている。

なんてヤツだ。芹沢さんを引き合いに出せば僕がホイホイと動くとも思っているのか。

不思議そうな母さんの視線をかわして、ケータイを自室に放り込み、僕はコンロ周りの掃除へと向かった。

そしてくたびれた両腕をぶら下げてＴ字路に突っ立っている。も

う芹沢さんを気にして服装を気にする時間の余裕も気力の余裕も無かったため、非常にラフな格好である。具体的には、思い切り部屋着用のくたびれたトレーナーにフリースとコートを着込み、下は皺もついたよれよれのジーンズである。

やっぱり芹沢さんをチラつかされただけで行くんじゃないか等というのは適さない。芹沢さんが行くなら行かないわけにはいかない。と『渋々』出てきたのだ。決してホイホイと出て来たわけではない。そんな言い訳をブチブチと呟いていると、不意に肩を叩かれた。

「おはよ」

「……あ、おはよ」

芹沢さんだった。三日前に会ったばかりで、間の二日間もメールでやり取りしていたというのに妙に懐かしいような感じた。

「おはようじゃナイでしょ。今昼の二時すぎよ？」

やや釣りあがった目つきながらも柔和な表情を見せる、芹沢さんの隣の少女。一瞬誰か分からなかったけれど、よく見れば鹿島里佳さんだ。彼女の私服姿を見たのは初めてであることと、ばつちりメークを決めていることで認識が遅れたようだ。

なんとなく意外に思っただけで、鹿島さんが肘で芹沢さんを小突いた。

「ほら、ね？ だからアンタも少しくらい化粧したほうがいいのよ」
「う、うるさいな。いいじゃない別に、嫌いなんだもん」

と、こちらに走ってくる足音とともに声が放られた。

「何でもみんな揃ってんだよ。早くないか？」

腐れ縁の彼だ。

鹿島さんが嬉しそうな笑みを浮かべながら一歩彼に近づく。

「最後に来たんだから、みんなを待たせた罰として今日のお金はア
ンタが持つてね」

「は？ おい待てよ聞いてねえぞそんなの！ ってか里佳だって今
来たところだろさつきまで俺とメールしてたんだから！」

「はいじゃあみんな行くわよ！。今日は派手に行きましょうー」

「こらこらこらー！ 二人分ならともかく四人分も支払えるわけな
いだろ！？ 無茶苦茶だ！」

ツツコミを入れる彼に、鹿島さんは大げさにため息をついて首を
振る。

「まったく、甲斐性つてものがないわね。それくらいポーンと払っ
たらどうなの」

「それ甲斐性じゃなくて金ヅルって言わないか？」

ふたりのあまりに息のあった掛け合いに、僕は芹沢さんと目を合
わせて、笑い出してしまった。

突然笑い出した僕たちに、不思議そうな顔で目を向けるふたりに
余計に笑いがこみ上げてくる。

「それで、じゃあどうするの？」

僕と違って気を落ち着けた芹沢さんが、笑みを浮かべたまま誤魔
化すように手を振って尋ねた。

鹿島さんと腐れ縁は顔を見合わせてニヤリと笑う。

「人数いるんだから対決にしよう」

「人数いないと行きにくいような場所——ボウリングとか」

ボウリングか。最近行つてないし、いいかもしれない。芹沢さんは少し考えるように視線を高く向けて、僕に着地させた。

「どう思う？」

「いいと思うよ。芹沢さんはどう？」

僕が問い返すと、芹沢さんはニコリと弾むように笑った。

「私も賛成」

「決まりだな」

彼がにやりと笑い、鹿島さんがにんまりと笑みを浮かべて頷く。

「じゃあ、早速行きましょうか」

二人が意気揚々と息の合った動きで先導する。このふたりは本当に気が合うらしい。僕は芹沢さんと目を合わせて苦笑し、彼らのあとに続いていった。

駅まで行き電車で揺られることしばし。

繁華街までやって来て、駅に程近いボーリング場に入る。

中はすごい音だった。ピンを跳ね飛ばす音や、ガンガンにかき鳴らす音楽でなんだか耳が悪くなりそうだ。人の入りも多く、満員寸前といった具合だ。幸運にもレーンはあるさき確保でき、シューズを借りてボールを選ぶ。鹿島さんの選んだボールと僕のボールが同じ重さだったことにへこんだ。

レーンに集まり、鹿島さんがなんだか熟練した手つきでボールを

拭きながら笑う。

「それじゃ、どうチーム分けしようか」

鹿島さんの提案に彼は不思議そうに問い返す。

「どうって、カップル同士じゃないのか？」

「いや、このふたり付き合ってないし」

鹿島さんに顎で示され、芹沢さんは照れたように笑って僕を見る。そのはにかんだ笑顔はちょっと反則じゃないのだろうか。じゃなくて、鹿島さんの様子と芹沢さんの反応からすると、ひょっとして僕が告白したことはまだ告げてないのだろうか。

ちよつと嬉しい。

「ま、グッパで分かれよっか」

鹿島さんは僕たちの様子に気づかなかったのか気にしてないのか、あつさりと言った。いいぞ、と答えを返した彼は僕に顔を寄せ、

「よしお前グーだせよグー」

「はいそこ八百長しない！ 決まってマッハでズル始めるってどうなのよ」

「ちえ、ダメか」

口先では冗談めかしているが、ちよつと本気で悔しそうだった。そんなに鹿島さんと組みたいのだろうか。

「さて、それじゃー行くわよ。チョコキとパーね。出さなきゃ負けよ、

分つかれ、ましょ！」

「え、ちょ、まっ」

唐突に手を変えられた彼は驚いているが、へんな手が出ることもなく出された。僕たちも一斉に手を出す。芹沢さんと鹿島さんがチヨキ、僕と彼がパーだった。

「よし、決まったわね。頑張ろうね！」

「おう。頼りにしてるよ、里佳！」

仲がよい女子勢とは対照的に男子勢の空気は微妙だった。だからそう露骨に残念そうな顔をするな。僕だって芹沢さんと一緒にチームになりたかったさ。

勝負の前から敗戦ムードの僕たちを振り返って、鹿島さんはいたずらっぽく笑った。

「負けたらジューズおごりね」

そうしてゲームは始まった。

試合は女子勢が可愛い成績に留まり、対する男子勢は手堅い成績を残していく。芹沢さんはあまり経験がないということでは仕方ないと思うが、鹿島さんがすごかった。ガーターも少くないが、一番ピンの一本倒しを決めるなどアクロバティックなプレーが映える。

僕は何度目かの投球で、思いのほか綺麗に転がっていくボールの軌道に笑った。

「あ、やった」

ガコガコン、と耳に小気味よい音が響き、ピンが全て倒れる。このゲーム初めてのストライクだ。僕が席に戻ってくると、芹沢さん

が目を丸くして言う。

「すごい、橋本くんってボウリングうまいんだ」

「あはは。まあね、と言いたいけど、今のはまぐれだよ」

僕のアベレージは百いくらで、たぶん普通か、少し低いくらいだと思う。僕が席に戻ると、彼が文句を言う。

「お前がストライク出しちゃったら俺が投げられないだろー」

「後に投げてガーター出されるよりはましだよ」

「ぐっ」

言い返すと彼は言葉に詰まった。さきほど僕が一投目を投げたとき、彼がクソボールを投げて半分も行かないうちにガーターに落ちたのだ。格好いいところを見せるために投げている彼は反論できないだろう。

僕たちがそんなやり取りをしているのをよそに、芹沢さんが伸びをししながら言った。

「あーあ、こんなことなら橋本くんチーム組めばよかったなあ」

芹沢さんのその言葉はちょっとかなりとんでもなく嬉しい。妬んで彼が肘で突いてきても気にならないくらい嬉しい。台に隠して足を踏んでやる。

「ちょっと、そういうこと言わないでよ、チームワーク崩壊よ?」

鹿島さんが芹沢さんにのしかかるようにじゃれつきながら言う。されるがままになりながら、芹沢さんは言い返した。

「里佳があんなボールを投げる時点で崩壊だつてするよ！ もう少し頑張つてよ！」

「しょうがないじゃん真面目にやっつてうまくいかないんだしさー。楽しめればいいじゃん？」

「だったら罰ゲームとか言い出さなければいいじゃん」

女子勢のなんとも平和な絡みとは対照的に男子勢の水面下の仁義なき激闘は激しさを増す一方だった。しかしこのままでは殴り合いに発展しそうだったので目を合わせて止め時を計る。僕が口火を切った。

「それより、今度は鹿島さんの番でしょ？」

「あ、そうね。ようし、このまま流れに乗ってストライク出しちゃうわよ」

鹿島さんがそう言って笑いながらボールを取ってレーンに向かう。愛しの彼女の勇姿を見るために彼は攻撃をパタリとやめ、僕もいい機会と休戦する。なまじ腐れ縁だけあってこのへんの間合いは無駄にお互い承知していた。

「ごつめーん、ガーター出しちゃった」

「ちよつと里佳ああああー！！」

芹沢さんのわりあい本気の悲鳴が喧騒に吞まれて消える。

世界が終わる直前&let's下&get;

ボウリングは、結局もう一ゲームやることになり、そのときは僕と芹沢さんでチームを組むことが出来た。ボールの行方に一喜一憂して、いいボールはみんなで喜び、芹沢さんは一氣にうまくなつて僕より上手になった。最終的なスコアは、当然僕と芹沢さんのほうが高かった。

日が暮れても明るさが途絶えない不夜城のような繁華街を歩きながら、みんなで騒ぐ。

「里佳、お前ボウリングの才能ねえよ!」

「ちよ、そういう悲しくなるようなこと言わないでよね!？」

鹿島さんと彼が仲良く言い合っている。僕と芹沢さんはそれを笑いながら見ていた。少し早いかもしれないが夕飯を食べにファミレスに向かっているところだ。

僕の隣を歩く芹沢さんが首をかしげて尋ねてきた。

「ねえ、橋本くんはなにか食べたいものある?」

「うーん、特に思いつかないかな。芹沢さんは?」

考えても心に引っかけかりすらなく、すぐに聞き返した。芹沢さんは少し困ったように笑い、首を振る。

「なんでもいいかな。こういうのはみんなで騒ぎながら食べるのがいいんだよね」

「そうだね」

僕が同意すると、前を歩いていたふたりが僕たちを振り返った。

驚いて彼らの顔を見る僕の前で、ふたりはそれぞれ笑顔を浮かべて口を開く。

「ファミレスはやっぱり、騒げて安くて早いところだよな」

「それならいいところがあるのよ」

ぴっ、と人差し指を立てて得意げに笑う鹿島さん。本当にこのふたりは息が合っている。それにどうもこの慣れた感じを見るに、ふたりでデートを重ねたのはきっと、この繁華街なのだろう。案内してやろうという気概が、さっきから見え隠れしている。今もほら、僕たちの前を歩いて、弾むよう。

駅前の自動車が入れない大通りを歩いていて、たまにストリートミュージシャンがいるような広まった場所にきた。不意に無理矢理拡声器で拡大されたノイズだらけの大きな声が響く。

思わず耳を塞ぐ僕たちの周りに、声が降ってきた。

「いよいよ、世界の終わりは来たる！ 終末が訪れるのだ！」

顔をしかめながら声の元を見る。冴えない印象のごく普通の眼鏡をかけた青年が、熱っぽい興奮した目で手に持った拡声器に声を張り上げていた。

「聖書に書かれた最後の審判が訪れる。神は人間を見限られた！

人は滅ぶ、魂までも！ だが、最後に機会を残された！ 自らの罪を知り、濯ぐ^{そそ}ことで、魂の救済は約束される！」

「ああいうのは、好きじゃないな」

眉間に皺を寄せた彼が僕たちに顔を寄せてばやいた。鹿島さんはうなずいて、早く行くように促す。僕たちがそれに同意して通り抜けるだけだったここを早く去ってしまおうと再び歩き出した。

「世界の最期に救われるために、我々は——ぎゃッ!?」
「うるさいのよ!」

潰れた鈍い悲鳴と、ガツンという拡声器の落ちる硬い音。一瞬だけ飛び切り大きいハウリングが響き、途切れた。驚いて振り返ると、興奮した女性がヒステリックな声を上げて男を殴り飛ばしたのだと分かる。頬を押さえた青年が腰を抜かしたまま女性を見上げた。

「な、なにをするんだ! 俺は、ただみんなが救われてほしいと——」
「うるさいって言ってるでしょ!」
「ぎゃあッ」

女性は言葉になりきらない金切り声を上げながら青年の顔を蹴り飛ばした。青年は涙を流しながら顔を抑える。その姿を、果たして本当に見ているのか、それともまったく別の何かに向かって言っているのか、女性はまくしたてた。

「世界が終わるなんてありえるわけがないのよ! 終わるわけがないじゃない! 狂ってるんじゃないの!」?

髪を振り乱し、顔を真っ赤にして女性はわめき散らす。青年は震える肩で不意に拳を握り締めた。

「どうせ、世界が終わるなら……コイツくらい、殺したって……」
「こんなところでケンカしたら迷惑だろ」

不意に、その対立の構図に割り込む人影があった。
鹿島さんが声を漏らす。彼だった。彼は首を振ってふたりを見比

べる。

女性が怯えたように彼を見て、自分の体を抱くようにしながら後退りした。

「な、なによアンタ」

「通行人。見るよ、みんな迷惑がつてるぞ」

手を広げて青年と女性に辺りを示す。思わぬ狂態に足を止めていた人々が気まずげに急に動き出した。そこで注目を集めていたことに気づき、青年も女性も憎々しげな顔をする。

彼はため息をついて、まずは女性に顔を向けた。

「とりあえず、あんた。そんなに怒って叫んでると胎教に悪い。子供ののためにもゆっくり落ち着いてろ」

女性は顔を青くして自分のお腹に顔を下ろした。まだまったく大きさは目立たないが、ほんとうに、その胎には新しい命が宿っているのだろつ。彼はそんな女性の背中を押して離れることを促した。

「おい、待てよ……どうせ世界は滅ぶんだ。いくら足掻いたって子供なんて産めないよ!」

青年がその女性の背中に向かって呪詛のように叫ぶ。彼は、言葉を続けようとした青年に割り込み、首を振って告げた。

「どうせ最期なんだろ？　なら、好きにゆっくり過ごさせてやっていいじゃないか」

「……それは」

青年が黙ってうつむいた。そこに何を見たのか、彼は僕たちのほ

うに戻ってきた。行こう、と促して歩き始める。

交差点から離れようというとき、警察が駆けつけてきた。きっと、青年を追い払うために呼ばれたのだろう。僕たちはあまり気持ちいいとは言えない気分ですの場を後にした。

沈鬱な表情を浮かべるみんなを見て、鹿島さんはなんとか盛り上げようと話を持ちかける。彼は何事もなかったようにそれに乗リ、芹沢さんも振られる話題に答えるうちに、なんとか今の出来事をこのみんなの雰囲気から押しやる事が出来た。その渦中にいる僕も、あまり気にした素振りも見せず、その輪に入っていく。

ファミレスに入るころにはすっかり元の雰囲気に戻り、鹿島さんが盛り上げ彼が乗っかり芹沢さんが突っ込んで僕がまとめる。そんなふざけ合える四人に戻っていた。

バカみたいにファミレスの料理をべた褒めし、「宝石箱やー」を連呼してみたり。

ドリンクバーで飲み溜めようとした彼が頻繁にトイレに行ったり、それを馬鹿にした鹿島さんのケーキを彼が一口奪って、本気で怒られたり。

お詫びのためにもう一個頼まされて、明らかに帳尻が合わないとぼやいたり。

ボウリングのネタをいまさら引つ張り出して突っ込んだり突っ込まれたり。

鹿島さんと彼の夫婦漫才に声を出して笑ったり。

芹沢さんと僕の間係を問い質されて告白したことを自白させられたり。

そのことで締め上げられて、冷やかされたり。

冷やかし返すと、あんなに慣れていたと思つたふたりが初々しく真っ赤になったり。

微笑ましく見守っていたら逆上した彼に殴られたり。

芹沢さんと笑い合つて。

とても、とても楽しい時間を過ごした。

それでも僕は。

楽しさの中で、心の片隅で、チラリと。
青年と女性のことを思い出していた。
別に何か感想を抱いたわけじゃない。

ただ、

ああ、世界の終わりなんだな、と。
そう思った。

それだけ。

世界が終わる日

僕はその日、朝早くに目が覚めた。

胸がざわめく。

朝日が昇ったばかりの空を見て、思う。

……今日が、世界最後の日か。

とてもじゃないけど二度寝する気になんてなれず、僕は起き出して着替えた。さすがに平日でもこんなに早く起きないという時間だから、両親とも起きていない。

僕はフリースを羽織って一階に降りた。しんとした家はどこか世界の終わりを超然と受け入れるかのように、落ち着いているように見える。綺麗にした床が壁紙の白を反射して、部屋が明るく見えた。なんだか神妙な気持ちになって、僕は菓子パンを取ろうとした足を変える。

米びつを見て、釜を持ってきた。米を入れるザララという音が響き、シンクに持っていった磨ぎ始める。自発的に料理に取り組むのは初めてだが、調理実習くらいならやった。できないことはないだろう。ざつ、ざつ、という音がキッチンに響く。母さんがいつもこうしてご飯を用意していたことを思い出して、不意に目頭が熱くなってきた。二の腕に目をこすりつけるようにしてこぼれる前に拭う。炊飯器にセットし、スイッチを入れた。そうして冷蔵庫から食材を取り出し、まな板を出す。ジャガイモとにんじんとねぎと豆腐。ごぼうなどの灰汁が出る食材はあまり使わないほうがいいだろう。水に浸す、とか細かいことは全く分らない。

蛇口から水を流し、具材を水洗いする。ピーラーは見つからなかったので皮むきも手作業だ。我ながらつたないと痛感する手つきで、ざく、ざく、とゆっくりと切り分けていく。

時間を掛けて全て切り終わる頃には、すっかり日が出ていた。普段なら母さんが起きてくる頃だが、休日に来て早起きする必要もないので、きつとまだ寝ているだろう。火の通りにくいと思われるにんじんやジャガイモから水をたっぷり入れた手鍋に落とし、コンロに掛けた。はじめは元栓のことを忘れて火をつけようとしていて、慌ててガスの元栓を捻る。しばらく経ってからだしのことを思い出し、急いで冷蔵庫に入っていただしの素を放り込む。

煮立ってからしばらくして菜ばしをにんじんに刺すと、まだ少し芯が固かった。もう少し待つ。

そして豆腐を入れ、ひと煮立ちさせた頃に細かく切ったネギを投入する。そして味噌をお玉に入れて溶き入れる。たぶんあつてはすだ。味見してみると少し味が薄かったので、もう少し増やす。

そんなことをしていると、階段から足音がした。

「あら、珍しい。なにやってるの？ 料理？」

「うん、まあね」

母さんだった。僕は恥ずかしくなってもない風を装いながら鍋をかき回す。母さんも、同じようになんでもない風を装いながらも素直に感嘆して、へえ、と声を上げた。

「すごいじゃない、頑張ったわね……っ」

その声に不意に嗚咽が混じった。驚いて振り返ると、母さんは顔をくしゃくしゃにして涙をこぼしている。

そうか、と僕は思った。

……世界の終わりを意識しているのは、僕だけじゃない。

母さんは僕を抱きしめながら、嗚咽をこぼす。しゃくりあげながら、言葉を重ねた。

「ありがとうね。ありがとう……」
「……うん」

いい年して恥ずかしい、と思ったが、僕は何も言わなかった。なにも親孝行してこなかった僕の、せめてもの恩返しになるだろう。もちろん、世界の終わりなんていうことはただのいたずらで、何もなければ、それでいいのだけれど……。

ピー、と音を立てて、炊飯器が炊けたことを報せた。母さんは僕を離し、涙でぐしゃぐしゃになった顔でも何もなかったように笑い、ご飯をよそいに行った。僕もお碗を取って味噌汁を注ぐ。

炊き立てのご飯と味噌汁の匂いにつれられて、父さんも起きてきた。キッチンに立つ僕に驚いた顔を見ると、母さんが朝食を僕が作ったのだと誇らしげに言い、さらに驚いた顔をする。恥ずかしかったが、たぶん、幸せというのはこんなものなのだろう、と思った。そう思うと何も言えなかった。

照れ隠しも自慢も、何も。

朝食はいつにもまして明るい母さんが主導になって会話が弾み、いつもの倍も時間が掛かってしまった。味噌汁の味は濃いい、にんじんもやっぱり固かった。逆にご飯は少し柔らかくなっていた。次の回の課題だな、と父さんは笑う。

「出かけるの？」

朝食の後、僕が外出することを言うと、母さんは怒ったようにそう言った。その目は不安や恐怖、祈りさえあるように見えた。父さんは黙って僕を見ている。

僕は言い訳や説得を口にする気はなかった。
だから別のことを言葉にした。

「僕さ、……好きな人ができたんだ」

母さんは目を丸くして、口を開かず。反対に、父さんが口を開いた。

「その人のところに行くのか？」

「うん」

僕がうなずくと、父さんは相好を崩した。

「そうか」

目元は笑っているけれど、眉は複雑そうに皺が寄っているし、口元はまだ物足りなそうに動いている。色々なことを聞きたいのだろう。

それでも、口にしたのは一言だった。

「いつてこい」

「お父さん。こんな日くらい……！」

父さんは、母さんの口を口付けで塞いだ。

母さんはもちろん、僕も驚いた。この両親が僕の目の前でこんな夫婦らしい、というより恋人らしいところを見せたのは初めてだ。父さんが離れると、母さんは顔が燃え上がったように真っ赤にする。これまた驚く。この期に及んで母さんの女性らしいところを目の当たりにするなんて思わなかった。

母さんが泣き崩れる。父さんに目で促されて、僕は慌ててリビングを飛び出した。どうらいものを見てしまった。

でも、と階段を駆け上がりながら、僕は頬をほころばせる。

家族っていいなあ。そう思った。

支度を終えて着替えてきた僕は、両親に玄関まで見送られた。振

り返って、真っ赤になった目で微笑む母さんと、いまさら息子の前で思い切った行動を取ったことを思い出したのか、顔を赤くしている父さんを見る。

「それじゃ、行ってきます」

「いつてらっしゃい」

「うん。明日には、帰ってるから」

父さんも母さんも、笑ってうなずいた。

丁字路に来た。

もう枯葉も見当たらない。冬だった。師走の大晦日^{おおつこもり}。真冬も真冬。真っ只中だ。あいにくの曇り空を見上げて、せめて雨は降らないでくれと願う。

駆け寄るような靴のこすれる音と、弾む息、そして聞きなれた声が聞こえた。

「お待ちせ」

「芹沢さん……って、どうしたの！？ その顔！」

振り返った僕は仰天した。芹沢さんの頬は真っ赤になって腫れていたのだ。芹沢さんは腫れた頬に手を当て、恥ずかしそうに笑った。

「ちょっと、お父さんに引ッ叩^{ぱた}かれちゃって」

「ええっ！？ ちょっと、大丈夫なのそれ！？」

「平気へいき」

「いや、そうじゃなくて、ケンカしたまま来たんじゃないよね！？」

僕の真剣な詰問に、笑っていた芹沢さんは少し驚いたように笑みを抑えて僕を見た。そして、不意に穏やかな微笑みを浮かべる。僕のほうがたじろいだ。なんで急にそんな聖母のような慈愛に満ちたような笑みを浮かべるのか。心臓に悪い。

「大丈夫。ちゃんと納得させて出てきたよ」

「そ、そう。なら、いいんだけど……」

一挙に挙動不審になりながらも答える。そんな僕に芹沢さんは笑いかけて、手を取った。

「行こっ！」

「う、うん」

弾むように歩き出す芹沢さんに引つ張られるようにして僕も続く。つながれた手を見て、顔が赤くなる。されるがままになりながらも駅への道を歩いていく。しかし、ふと僕は冷静になった。通りに臨時休業になっている店がずいぶん多い。

「たぶん、こんな日だからだろうね」

声に振り返る。芹沢さんも、僕を同じところを見ていた。つとその視線が上がって僕を見る。

「いつもの大晦日なら、きっと営業してたよ、あそこも。私たちがこうしていられるのも、休日にくそ働いている人たちがいるからなんだよね」

「そうだね。でも、それはきっと普段だってそうだ。昨日も一昨日も」

僕も微笑んで、また振り返った。店のガラスに張られている臨時休業の張り紙が、風でかすかに揺れる。

「あのボウリング場だって、働いている人がいるから利用できるんだ。もちろん、利用する人がいるから働くんだらうけど、さ」

そうやって世界は回っているのだ。

多くの人が休む今日、世界は初めてその営みを休める。

「きっと今日は、特別だ。真実はどうであろうと」

「……そうだね。うん、私もそう思う」

言葉に振り向く。芹沢さんは、僕を見上げて微笑んでいた。

「今日は、特別な日になるよ」

「うえ、あ、うん。そ、そうだね」

僕は急に恥ずかしくなってきた。ずいぶんと詩的なことを口走っていたような気がする。うわ恥ずかしい。芹沢さんはからからと笑って僕の腕を揺らした。

「もう、何？ 変な声出しちゃって。せつかくいいこと言ってたのに台無しだよ」

「は、ははは」

穴があつたら入りたい。

なんだかんだで駅までたどり着いたが、電光掲示板を見上げて僕たちは沈黙した。それはそうだ。店が休業しているように、電車だって人が運転しているのだ。当たり前かもしれない。

ダイヤが大幅に乱れている。二時間に一本くらいのペースだろう

か。

きつとほとんど誰も運転手がないに違いない。

「それでも電車、動いてるんだね」

芹沢さんがつぶやいた。そう、たとえ遅れているといつても、電車を動かして乗客を運んでいる人がいるのだ。そもそも発電所で働いている人もいるのだろう。大切な人がいるかもしれないのに。あるいはいないかもしれないが、それでも、大切な自分の最後の時間なのに。

働いてくれている人がいるのだ。

「こういう仕事で、人を幸せにしてるんだね」

僕が言う。芹沢さんがうなずいている気配があつた。僕たちは連れ立って、駅前を後にする。きつと、もっと乗りたい人がいるに違いない。僕たちはきつと、生家のあるここで、最後を過ごすべきなのだ。

結局戻ってきて、学校に程近い公園にやってきた。ベンチに腰を下ろし、寒い冬の風に身を震わせる。

「このほうが暖かいでしょ」

ふわり、とやわらかい匂いがして、右半身が温かくなった。芹沢さんが僕の隣に体を密着させて腰掛けたのだ。動揺する僕を見て、「嫌？」と小首をかしげる。とんでもない、嫌なわけがないです、とそれつの回らない口で言う、と、芹沢さんはおかしそくに笑った。僕はその笑顔に胸が一杯になるのを感じて、やっぱり芹沢さんが好きなんだと感じた。

とりあえず、これは役得だと思おう。

「ね、覚えてる？ 初めて話したときのこと」
「え？」

芹沢さんが穏やかに口を開いた。

僕はその急な質問に驚き、また内容について思いをめぐらせた。初めて話したとき、なにかあっただろうか。芹沢さんと交流する機会があったのは今年になってからで、その前はクラスも違ったし、他所のクラスの可愛い子くらいの認識だったと思う。

芹沢さんは一目惚れしたのではなく、ある日気づいたらいつの間にか猛烈に好きになっていたというよく分からない恋だったので、最初のころは別段意識もしてなかったはずだ。考えをめぐらせても、さっぱり記憶にひっかかるものがない。

「……いや、ごめん。思い出せないや」
「そっか。実は私もさっきまではあんまり。でも、急に思い出しちゃった」

芹沢さんは小さく笑って、言った。

「たぶん、最初に話したときって、『このプリント芹沢さんのじゃない？』だったんだよね」

「……ええっ？ なにそれ、微妙すぎる」

「ふふ。そのあとは『やっぱりそうだと思ったんだ』で、それで会話は終了」

「終わり、って。最悪じゃないか！」

「あははっ。でも、結構そんなもんだと思うよ。最初なんて」

明るく笑う芹沢さんはそう結び、懐かしそうに目を細める。僕はつくづく自分が情けなくなっているが、芹沢さんが楽しそうなのが

せめてもの救いだ。でも、僕も思い出した。

「そつえばさ、体育の時間に芹沢さんにボールぶつけられたことがあるんだよね」

「えー？ そんなことあったっけ？」

「うん。ほら、ソフトボールやってたときにさ、打った弾が肩に。青あざになったよアレ」

「あーあーあー、思い出した。あつたねえ。アレあざになってたんだ。ごめんねー」

「うん。ま、大丈夫だったしね」

「そつか、ありがと。そつえばさ、体育といえは――」

そんなくだらない会話が、えんえんと続いた。時には会話が切れたりしたけど、僕が静かなのも落ち着くといったら芹沢さんは笑って、なるほど、そうかも、と答えた。時間の流れは驚くほど速かったり、もどかしいほど遅かったり、さまざまだったけれど、気がついたら日がとつぷりと暮れていた。

「お昼も忘れて話し込んだじゃったね。なにか食べ物探してこよう」

震える体をゆすつて、並んで歩き出す。多くのお店が臨時休業だったが、駅前から外れたところに個人経営の料理店を見つけて、入ってみた。

お昼の分まで取り返す勢いで食べる。店主夫婦はまだ若くて、板前をやっていたというご主人は自分の店を構えるのが夢だったと語ってくれた。お客も少ないから切り盛りも大変だったのだろうけど、オマケまでしてくれたような気のいい人達で、思わず話が盛り上がってしまった。四人であれこれ話しているうちに夜の帳が落ちて、半ば追い出されるようにして店から送り出される。

暖かい店内から外に出ると、一段と寒さが肌に刺さる。真っ暗な

道を歩きながら、芹沢さんがつぶやいた。

「すぐ近くにこんなお店もあったんだね。ぜんぜん知らなかったなあ」

「そうだね。こんな目立たないところにあるからかな」

しばらく言葉が途切れて、黙って道を歩く。駅から歩いてきて、この道はもう何度もふたりで歩いてきているのだと、はたと気がついた。

やがて芹沢さんが静かに言った。

「……また行きたいね」
「うん」

うなずいて答える。

やがて、分かれ道の丁字路に戻ってきた。ふたりでコンクリの壁に背を預ける。僕たちの場所はここだ。僕はそう思った。芹沢さんもそう思ってくれていることを願った。

出会って、分かれて、また出会う。

そのたびに、嬉しくなって好きになって、寂しくなって好きになる。

そんな、魔法の場所。

ぼつり、ぼつりと会話が交わされた。

これからしていきたいこと、この先のこと。未来のこと。明日のこと、明後日のこと。来月のこと。半年後のこと。来年のこと。二年後、三年後のこと。何十年と先のことを。

熱っぽく、ふたりで熱心に話しあった。

別に、結婚とかそういう子供っぽいけど夢のあることでも、どこ

るか色気のある話でもなかった。

就職の不安とか願望とか。

結婚適齢期とか。

子供のこととか。

おばさんやおじさんと呼ばれる日のこととか。

いつかマイホームを建てることとか。

初孫が出来たときの気持ちとか。

老後の想像とか。

そういう、とても些細なこと。

この先の未来があれば必ず来るけれど、この先がなければ絶対に体験できない、いろんなことを。

夜風が寒い。

その寒さが、熱を冷ました。

——今、何時だろう。

芹沢さんと会ってから無意識に時計を見ることを拒んでいた僕の手が、自然に携帯に伸びていた。開き、時計の表示を見る。

「十一時、五十六分？」

口に出して、硬直した。

もう、終わる。

二度と来ない、この特別な今日が。

終わってしまう。

かあつと体が熱くなった。今日一日芹沢さんとふたりきりで過ごせて幸せだった。でも、それだけじゃダメなんだと思った。やり残したことがあるような気がしてならなかった。なんだろう、何が足りないんだ。分からない。考えても思考は白熱して空転するだけだった。なんでだ。なにかがしたいんだ。なんでこんなに何かがした

いんだ。なんで自分のやりたいことも分からないんだ。今日のうちにやらないといけないのに。もうないのに。

最後なのに。

鼻の奥がツンと痛んで、視界がにじんだ。涙が溢れそうになって慌てて深呼吸をする。

芹沢さんに対して何かしたい、という気持ちではなかった。僕はもう告白も済ませている。今、改めて言うことは、むしろ未練臭くて跡を濁す行為であるような気持ちさえあった。

「橋本くん」

はっ、と我に帰った。口から吸い込む空気が冷たいことに気がついた。今、寒いんだっけ。

芹沢さんはコンクリート壁から背を離れた。落ち着いた表情で、僕を向く。僕も彼女を見ながら背を離して、正面に立った。潤んだ瞳に街灯の光を取り込んで、僕を見上げる。

その瞳に、呑み込まれたような気がした。

「私さ、最初から分かってたんだ。橋本くんに、告白されたときから、ずっと」

でも、誤魔化してた。怖くて、認めたくなくて。それがきつと幸せなことだと分かってたから、怖くなった。

芹沢さんは自嘲するように言って、顔をうつむけて肩を震わせた。

「だけど、昨日里佳に怒られたの。橋本くんに甘えるのもいい加減にしろ、って。それで後悔していい気になるつもりか、って」

いつも被害者面してた。たぶん、それでいい気になってた。だから私は、橋本さんと一緒にいられた。

「でないと、傍になんて居られないよ。誰かを想えるような強い人の隣になんて」

でも、

「私は、」

もう逃げるのは嫌。

「こんな特別な日を、」

逃げて終わるのなんて絶対に嫌。

「だから言っね」

遅れてごめん。

「本当は」

私は、

「橋本くんのこと、」

ずっと、

「心から」

心の底から、

「——大好きです」

ああ。

これは魔法のようだった。今、世界が爆発しても、僕らだけは平気でいられるような気がした。

震えるほどの喜びが胸を満たして、寒さも夜も街灯の明かりも、全て置き去りにして世界が回ってるような気がした。

そして同時に、僕は理解した。

やり残していたこと。

それは僕から芹沢さんにしたかったことじゃなかったのだ。

僕が、芹沢さんに望んだこと。最初から最後まで変わらず望んでいた、絶対変わることをない願い。それが今、叶えられたのだと理解した。

芹沢さんは顔を真っ赤にしてうつむいた。上目遣いに僕をうかがう、その殺人的に愛らしい瞳に僕は胸が爆発するかと思う。胸が痛い、痛いくらいに高鳴っている。この恋は、果たして行き過ぎじゃないかと不安になるくらい、僕の大好きな女の子が、愛おしい。

ああ、でも、時間よもう少し待ってくれ。

僕は願う。願いながら、口を開く。

もう願うだけで止まったりしない。

「芹沢さん」

「な、なに？」

芹沢さんは、少し怯えたように答えた。ひよつとして、僕が断ると思っているのだろうか。思わず笑みが浮かぶ。ありえない。地球が逆回転してもありえない、そのまま世界が終わってもありえない。僕は、すこし恥ずかしくなった。

でも、言おう。

願うだけでやめはしない。時間は無情なことに、いくら祈っても流れるのだ。

「……キスしよう」

「うえっ!？」

素っ頓狂な声を上げて芹沢さんの顔が真っ赤になった。でも僕の顔も真っ赤なはずだ。

思い出す。父さんが母さんに口付けをしていた姿。

とんでもなく恥ずかしい。
でも。

「う、あ、その……うん」

答えて、芹沢さんは一歩、恐る恐る僕に近付いた。

それだけでもう十分だと思えるくらい、僕は嬉しいと思っている。
でも、

もう時計を確認する時間さえ惜しい。

この、二度と来ない特別な今日。

僕も一歩近付いて、芹沢さんとコートが触れ合った。信じられないくらい顔が近くに来て、自分の心臓の音がうるさくなる。芹沢さんの大きい瞳が、僕の目を覗き込んでいる。

大好きな人と、誰よりも近くに。

その望みの着地点がキスというのは、なんとも子供っぽいかもしれないけれど。

きつと、僕たちにはこれくらいが合っていると思う。
手をつなぐだけで恥ずかしくて、

そばに居るだけで嬉しくなつて、
告白するだけで真っ赤になつて、
キスするだけで幸せになれる。
たぶん、これが、この日の僕たちなのだ。

芹沢さんが目を伏せた。僕も、顔をゆつくりと近付けながら目を
伏せる。

もしも、

もし僕たちにこの先があるとしたら、きっと、
そのときの僕たちに似合ったあり方で、特別な今日を過ごすのだ。

息遣いを肌で感じられて、熱を帯びているのが分かるくらい近く
になつて、

そして、僕たちは――、

その日

携帯が震える。

私は言おうと思ってた。なんとも言おうとしたけれど、どこかで怖気づいていた。口を突いてこぼれる言葉は違うもの。本当に言いたい言葉は引つ込んだまま。

コートの中に潜めている携帯が震える。

言いたかった。

言いたくなかった。

変えたかった。

自分の気持ちに気づいたから。

変えたくなかった。

今までの関係が、あまりに心地よすぎたから。

携帯が震える。

日は昇り、そして沈んでいく。その事実を、これほど恨めしく思ったことはなかった。

昨日が過ぎて、また今日がきて、去っていく。それがこんなに残酷なことだとは思わなかった。

この時間に設定していた通りに、携帯が震える。

来て欲しくなんてなかったのに。

鳴らなければよかったのに。

考えうる限り、最悪の形で迎えているのに。

携帯は鳴ってしまった。

風が吹き、堪らないほどの寒い空気が冷え切った体に吹き付ける。かじかんだ指で、携帯を止める。

もしかしたら、うまくすれば。そんな「たられば」が頭をよぎる。こんなはずじゃなかったのに、変わりたいと思っていたのに。

二十三時五十五分。

私が意気地のない自分への最後通牒として、自らアラームを設定

した時間。

この時間が来る前に、橋本くんに全てを伝えて、違った形で迎えたいと思っていたのに。

結局私は、いつものまま。

こんな特別な日でも、私は私。

情けない。

悔しい。

怖い。

悲しい。

怖い。

寂しい。

怖い。

怖い。

怖い。

変わるのは、いつだって、怖い。

橋本くんとの待ち合わせ場所にした、この丁字路。思い出の場所。どうして……、と言葉を浮かべて、急に恥ずかしくなった。でも

続けて頭の中に言葉を浮かべた。

どうして彼は、ここで私に告白なんて出来たんだろう。

よく晴れた、夜空の綺麗なあの日に。

怖くは、なかったのだろうか。

隣の橋本くんが不意に動く気配を見せた。私が携帯に気を取られて、少し会話が止んだからかな。

携帯を取り出して目を落とす横顔を見て、心の中だけで。

ねえ、どうして？

返る言葉は違うもの。

「十一時、五十六分？」

口に出して、硬直した。

もう、終わる。

二度と来ない、この特別な今日が。
終わってしまう。

ああ。

私の中でぐずぐずとくすぶっていた焦燥が、その一言で燃え上がり、一瞬で消え去った。

橋本くんの声に、焦燥と恐怖が垣間見えたから。

この誤魔化しのような今をつらく思っているのは、私だけじゃない。

ふわり、と勇気が沸いた。

今までの足が震えるような怖さも胸の底がひりつくような焦りも、嘘のように消えていた。

特別な今日、魔法の場所で。

もうひとつ。

私たちの思い出を増やそう。

この今を変えられるのは私だけ。

——ううん。

この今を、私が、変える。

「橋本くん」

言葉は自然に浮かんできた。

コンクリートの壁から背を離し、しっかりと立って顔をあげる橋本くんを見る。橋本くんもつられるように寄りかかっていた壁から背を離し、私と向かい合って立つ。

いつか、私が告白された日のように。

目と目が合つて、橋本さんの優しげな目元と黒い瞳を見つめる。私はしびれたようにそこから目を離せなくなった。もともと離す気もない。

「私さ、……」

心のままに口を動かしながら、その隅でチラリと思う。

橋本くんは、私に告白したとき、どんな気持ちだったんだろう。

全部言い終わったら、聞いてみよう。そう思った。

でも今は、この魔法が解けないうちに。

言わなきゃいけない。

全部。

聞いてくれるかな？

受け止めてくれるかな？

聞いてくれるよね。

大丈夫だよね。

橋本くん。

……この先は教えない。

ひみつ。

絶対、誰にも言わないもんね。

その日（後書き）

これにて完結です。

長かった。何年越しの恋だこれ。
今さら語る言葉も持ちません。

君に幸あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1445b/>

恋と世界とその終わり。

2011年1月5日21時57分発行